

2023 年度 地域連携センタープロジェクト事業
成果報告書

伝統文化のアーカイブ化を考える

2024 年 3 月
青森公立大学 経営経済学部
地域みらい学科 佐々木研究室 編集

巻頭言

本報告書は2023年度地域連携センタープロジェクト、学術文化振興財団「伝統文化のアーカイブ化 ～青森ねぶた祭を中心に～」事業の成果報告書である。事業の主旨は次の通りである。まず、これまでの比較祭礼調査を行ってきたが、それぞれの地域で調査を行う際に、資料などのデータ収集が困難な場所が多いことがわかった。青森の伝統文化についても同様なことがいえ、主に口承伝聞が多い。こういった現状から伝統の継承のため、すぐにでも体系的、集約的なデータのアーカイブ化が必要だと考えた。本事業は特に青森ねぶた祭の伝統を継承し後世に伝えるためのアーカイブ化を目的とするものである。

こうした主旨のもと、アーカイブ化が進んでいる先進事例として、2023年度は京都祇園祭の山鉾の調査、および博物館などの文化施設の調査を行った。また同時に「青森ねぶた祭」メディア・アーカイブ研究会をたちあげ、文化保存のための共同研究をスタートさせた。詳細については「1 調査報告：伝統文化のアーカイブ化を考える」を一読していただきたい。今回の調査研究を通じて感じたことは、①伝統文化のアーカイブ化はシビック・プライドが基本にあること、②そのため地域の文化資源は地域の街づくりに非常に有効であること、③そして近年ではすでに、文化資源のデジタルアーカイブ化がすすんでいること、などである。「青森ねぶた祭」を例に挙げれば、祭礼に使われる山車をはじめ、衣装、演奏用の楽器など、民俗学的にも価値のあるものが多数ある。そういったものを収集・保存・展示するとともに、場合によってはデジタル化していくことが望まれる。また地域ならではのコンテンツとして「ねぶた」制作技法は有効活用できる。そのため青森市をNEBUTA アートの街としてもっと売り出すことも可能だろう。そしてこのような取り組みについて最も重要なのは、それが市民としての誇りとなることである。今回の伝統文化のアーカイブ化の調査研究は、失われていくものを残すためだけでなく、それを地域の未来のために活用する視点を提供するものである。次年度以降はこうした視点をさらに展開させつつ、具体的なアーカイブも行っていくつもりである。

最後に今回のプロジェクトには、青森公立大学佐々木ゼミの学生はもちろんのこと、竹浪比呂央ねぶた研究所、そして青森のメディア関係者など多くの方に関わっていただいた。また調査先では、京都祇園祭の山鉾関係者をはじめ、多くの方のご協力をいただいた。特にお忙しい中ご対応いただいた、愛知大学 地域政策学部 准教授 佐藤弘隆先生、立命館大学 文学部 准教授 河角直美先生、蠅螂山保存會 常任幹事 岡部正宏様、長刀鉾保存会 岡本幸三様、京都芸術大学 空間演出デザイン学科 教授 大野木啓人先生、京都芸術大学 芸術教養センター 教授 箭内新一先生、白沙村荘 橋本関雪記念館 館長 橋本妙様には改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

2024年2月

青森公立大学 教授 佐々木てる

目次

第一部 2023 年度調査報告

- 1 調査報告：伝統文化のアーカイブ化を考える
～京都祇園祭、そして文化施設から～ 佐々木てる 1
- 2 京都祇園祭調査 ～祇園祭の保存・継承実態について～
地域みらい学科2年 佐々木ゼミ
阿部仁菜 伊藤源大 内海空
鳥山凌空 松田優唯 中野ありす 吉田翔太 15
- 3 山田浩之編『都市祭礼文化の継承と変容を考える』レジュメ集
(ミネルヴァ書房、2016年) 37

第二部 2022 年ねぶた運行団体紹介

- ・2023 年ねぶた運行団体紹介 50

第三部 資料：地域ねぶた調査の結果

- ・2023 年度地域ねぶた運行に関する調査結果 77

第一部 2023 年度調査報告

1 調査報告：伝統文化のアーカイブ化を考える

～京都祇園祭、そして文化施設から～

青森公立大学 経営経済学部
地域みらい学科 教授 佐々木てる

はじめに

本研究の目的は伝統文化をいかにアーカイブ化していくか、その方法を考えることにあ
る。というのも、ここ数年青森ねぶた祭以外の祭礼調査を行い、その困難さに直面したこと
にある。すなわちたいていの場合、外部者が学ぶための学術的な資料・史料が、体系的に残
っていないからである。地域の祭礼などの場合、それが有名なものである場合は、観光客の
ための資料館・博物館が整っている場合もある。それ以外は、本当に博物館や郷土館の少し
のスペースで紹介したり、図書館の地元の歴史資料で学ぶしか手段がない。また祭礼などに
関しては、関係者を訪問し聞き取りを行うのが常であるが、「詳しい人がいなくなった場合
これらの伝承はどのようになっていくのだろうか」「この ICT 時代にもかかわらず、口承伝
聞でしか残らないのだろうか」と感じることが多い。

ひるがえって、青森ねぶた祭についてはどうだろうか。青森ねぶた祭に関しては、青森駅
近くに「ねぶたの家 ワ・ラッセ」という施設がある。ここではコンパクトにまとめられた
歴史などを学ぶことができる。また同時に、ねぶた本体が 4 台も飾られており、インパクト
のある素晴らしい施設になっている。しかしながらその目的はむしろ観光客にむけたもの
であり、ミュージアム（博物館・美術館）としての学術的な目的とは異にする。ここでいう
学術的とは、歴史的な資料・史料・芸術品などの収集・保存・展示のことを指している。す
なわち日本屈指の祭礼である、青森ねぶた祭でさえ、それを学ぶため、そして後世に伝えて
いくための施設（ミュージアム）がないのである。

青森ねぶた祭は確かに民俗行事であり、毎年繰り返しであるからあえて「継承」という
ことを意識する必要はなかったかのかもしれない。しかしながら、昨今の「ねぶた」という
造形の青森外での評価は特筆に値するだろう。またすでに 300 年以上続いている行事で使
用されてきたものは、徐々に歴史的価値が高まっているといえる。時代を知っている人の語
り、当時の写真、つかってきただ具など、今まさしく次世代へ継承することが必要なのでは
ないか。そしてそれを学べるように、体系的にアーカイブ化していく必要があるのではない
か、ということが本研究の出発点にある。

さてこのようなアーカイブ化を考える上で、参考になるのが京都祇園祭である。というの
もすでに 1000 年以上続いている祇園祭では、さまざまな経緯がありつつも継続して山鉦が
出陣している。青森ねぶた祭と違い、毎年壊す、いわゆる民俗行事ではないため、できるだ
け伝統的な神事としての形をのこしている。そのために、祭礼に関わる各所が伝統保存のた

めに様々な工夫を凝らしている。こうした点から祇園祭の伝統継承の方法を学ぶこととする。2023 年度は実際に祇園祭に訪問し、その際山鉦を登場させている団体から聞き取り調査を行った。また祇園祭を調べる経緯で、デジタル・アーカイブの手法に出会った。伝統文化を継承するために、その有形無形の財産をいかに次世代につないでいくかが重要となっている。ここではまず、伝統文化のアーカイブ化という概念について確認した上で、調査概要を説明する。次に調査報告を行うこととする。また本年度より、「青森ねぶた祭メディア・アーカイブ研究会」が発足したので、そこでの取り組みを補足資料として掲載しておくことにする。

1 伝統文化のアーカイブ化とはなにか

1.1 伝統文化保存

さて本研究で行うアーカイブ化とはどのような意味なのか。まずアーカイブ化の発想は、執筆者自身の専門が聞き取り調査であること、そして所属する学会（日本オーラル・ヒストリー学会）の主要テーマからヒントを得ている。そもそもこれまで聞き取りは、「テープ」で録音され、それを保存していた。しかしながらそれらのデータは、多くのは使用されなくなると、そのまま調査者の責任で廃棄されていた。これらのデータの中には歴史的に貴重なものも存在していたといえるだろう。これに対し、近年ではデジタル化が進むとともに、他者にも利用可能なデータとして保存する傾向が増してきた。特にクラウド化が進んだことによって、より長期に、そして他の人と共有しやすい環境が整ってきた。こうした背景から、聞き取りを行ってきた時の生の音声データ（一次資料）を共有や活用する際の問題点などが本格的に問われてきている。

実際こういったテーマで、2022 年 11 月の第 96 回日本社会学会（大手門学院大学）では、社会学教育委員会企画テーマセッションで「質的データのアーカイブ」といったものが行われ、欧米の社会学系学界の動向なども報告された。また同年 9 月の第 20 回日本オーラル・ヒストリー学会（立教大学）のシンポジウムでは、「東アジアにおけるオーラルヒストリー／口述史の展開と課題」と題し、国際シンポジウムが行われた。そこでは韓国、台湾、日本の研究者が各国の現状について報告を行っている。これらの報告から聞き取り資料の生データ（一次資料）のアーカイブ化について、世界的に取り組まれていることが明らかになった。付言すれば、日本ではむしろ他の諸国の取り組みより遅れていることも明らかになっている。そのほかアーカイブ化における問題点も明らかになりつつある。例えば、アーカイブ化したデータを使用する際の話し手のプライバシーの問題、話し手の家族や親族の許諾の問題、使用用途や方法などの管理などがある。これらのことは一個人の問題ではなく、データによっては政治的な問題にもつながっている。アーカイブ化の利用には、越えなければならないハードルが存在することも事実である。しなしながら、現在の「声」を後世に残すことは、現在生きているものの責務だといえる。本研究の目的はこういった学術的なトレンドからも来ている。

さて、アーカイブ化に関してここでは聞き取りデータのみを例にあげたが、データは様々な種類がある。例えば映像、画像のデータ、活字のデータなどが指摘できる。すでに過去の歴史的な文書などはマイクロ・フィルムに移しているなど、様々なやり方で保存されてきた。そして、もともと博物館や美術館といったミュージアムは、こうした過去の貴重な「モノ」のアーカイブ化する場所に他ならない。その意味で、アーカイブ化とは、人類史において貴重な資源を保存という行為に他ならない。さて、現代においては、いわゆる「モノ」をそのまま保存するやり方から一歩進んだアーカイブ化が行われている。それがデジタル・アーカイブといえるだろう。

1.2 デジタル・アーカイブの可能性

デジタル・アーカイブとはまさしく、さまざまな歴史的な資料・史料をデジタル化して保存していくものである。そしてこのデジタル化されてものは、Web 博物館のような形で、一般に公開されることが多い。歴史的に貴重な絵画や作品などは、常に展示されているわけではない。また実物が展示されたとしても、なかなか見に行くこともできない。そのため、最新の技術を使って、それらのものをリアルに Web 上に再現することが試みられている。例えば山梨県立博物館は、葛飾北斎の「富嶽三十六景」のデジタル化に取り組んでいる。これは「リマスターアート」呼ばれ、「高解像度の画像処理技術などを駆使し、絵画作品を余すことなく記録し、再現、伝達する多目的画像運用技術を用いて制作されたレプリカ」のことである（テレコミュニケーション編集部編 2020：27）。従来のスキャナーの技術とは違い、作品をコピーする際の作品への影響が非常に少ない。同時に高解像度であるため、作品の凹凸までリアルに再現される。この取り組みは NTT 東日本と共同ですすめられ「Digital×北斎」として注目をあつめた。NTT 東日本はこうした取り組みを「地域の価値ある文化芸術のデジタル化と活用を通じた地域活性化の実現～「ICT×文化芸術伝承」による地域社会への貢献～」として各地で取り組みを開始している¹。

これらの取り組みは、絵画といったアートだけでなく、地域の伝統文化である祭礼にも応用することができる。例えば NTT の取り組みとして、青森ねぶた祭に ICT の技術を導入して、ねぶた、ねぶた祭の映像コンテンツを格納し、全国の様々な場所で再現できる仕組みを考えている。すなわち VR や AR で、青森ねぶた祭を再現する取り組みといえる（同：48-64）。その実践例は、青森市の NTT 東日本のビルの 1 階の展示施設において、青森ねぶた祭期間中に見ることができる。これまで青森ねぶた祭に登場する「ねぶた」本体は、すべて壊されており、その姿は写真でしか見ることができない。しかしながらデジタル化が進めば、3D 画像として全団体のねぶたが保存される可能性がある。

祭礼に関する同様の取り組みは、学術的には立命館大学アートリサーチセンターがいち早く行っている。例えば「祇園祭デジタル・ミュージアム 2021ーバーチャルで楽しむ祇園祭ー」といったものが Web 上で公開されており、祇園祭に登場する山鉦が 3D 化され閲覧されるようになっている²。また青森ねぶた祭に関して、個人であるが最もその取り組みに

近いことを行っているのが、ねぶた師の林広海氏の制作する「青森ねぶたミュージアム」である³。歴史的な作品を制作者や運行団体、年代、受賞した作品など検索できるようになっており、検索すると現存する写真がでてくる。膨大な資料を個人として行っているという点で画期的なデジタルサイトといえるだろう。しかしながら、こういった取り組みは本来、主催3団体である、青森市、観光コンベンション協会、商工会議所などが主導としてやるべきであろう。本研究の目的は、こうした林の取り組みと協力しながら、将来的には(デジタル)ミュージアムをつくっていくことにある。

さて将来的な方向性はともかく、現時点でのアーカイブ化の現状についての調査報告を行うことにする。

2 京都にみる伝統文化の継承 1：祇園祭

上記のような問題意識、またアーカイブ化の実践例を考えるため本年度は京都を中心に調査を行った。特に「京都祇園祭」における山鉦を管理している町会の工夫を調査した。また伝統的な作品などは、いわゆる記念館や美術館などに保管されている。それらの場所へ訪問し、その実践例を学んだ。京都祇園祭の調査内容に関しては、「2 京都祇園祭調査～祇園祭の保存・継承実態について～」で詳細に扱っている。ここでは前提となる京都祇園祭についての基礎知識を確認しておく。また前節で述べたデジタル・ミュージアムの取り組みに関しては、今回は深く調査することができなかったため、継続課題としておく。ただし祭礼とは別に、芸術保存の視点から京都調査を行ったので、その報告もしておく。

2.1 京都祇園祭

まず京都祇園祭とは、毎年7月1日から7月31日に行われる京都八坂神社の祭礼である。一か月間行われるものであるため、前後（前祭、後祭）に分かれている。前祭は7月14日～16日、後祭は21日～23日のそれぞれ3日間行われ、この期間に山鉦が街中に登場する。これらの山鉦は、前祭は17日、後祭は24日にそれぞれ巡行し八坂神社に詣でる（山鉦巡行）。なお17日の夕刻には神輿が登場し、八坂神社から四条街の御旅所に向かう（神幸祭）。そして7日間滞在した後24日の夕刻に御旅所から八坂神社に還る。祭が最も盛り上がるのは、やはり前祭の特に宵山であろう。街中に23基の山鉦がたちならび、ライトアップされる（後祭は10基）。毎年多くの観光客がこの宵山、そして翌日の巡行を見にやってくるのである。

この祇園祭は、発祥は869年（貞観11年）に疫病が全国に流行したことに端を発する。当時の国の数にちなんで66本の鉦をたて、疫病退散を願って「牛頭天皇（八坂神社でまつられる神）」を祀ったのが起源とされている。この「祇園御霊会」は970年以降、毎年行事となって現在まで続けられているという。ちなみに現在のような山鉦が出現したのは室町時代以降だと伝えられている⁴。

もちろんその長い歴史の中では中断することや、山鉦の台数が変化することもあった。し

かしながら、その保存や継承の工夫は学ぶことが多い。また祇園祭と同時に、各家々で保存されている貴重な屏風を展示する「屏風祭」が開催される。ここでは屏風はもちろんのこと、代々受け継がれている品々（例えば漆器、置物、掛け軸など）を見ることができる。そのほか、京都の弓矢町では「武具飾」⁵が行われ、本物の甲冑が展示される。このように、祭の主役となる山鉦だけでなく、多くの品々を保存伝承しているという点で、京都、そして祇園祭を第一に調査対象とした。

2.2 2023 年度 調査概要

2023 年度の祇園祭調査概要は下記の通りである。前祭の日に合わせて訪問し、分担してそれぞれの山鉦を訪問した。特に山鉦をどのように、誰が管理しているのかを中心に聞き取りを行った。

●祇園祭調査概要

日時：2023 年 7 月 14～ 16 日

場所：京都市内

訪問場所（佐々木）：船鉦、長刀鉦、蟪蛄山など

語り手：愛知大学 地域政策学部 准教授 佐藤弘隆

立命館大学 文学部 准教授 河角直美

蟪蛄山保存会 常任幹事 岡部正宏

長刀鉦保存会 岡本幸三

調査補助：佐々木ゼミ学生（阿部仁菜、伊藤源大、内海空、松田優唯、鳥山凌空、中野ありす、吉田翔太）

上記以外、各調査補助者がグループで、山鉦の関係者に聞き取りをおこなっている。

これら聞き取りを行った際の分析には下記の点について注意した。

- ①「モノ」の保存：山鉦は毎年使用しているものであり、これらのモノをどこに所蔵しているのか。また動く美術館といわれるように、その保存の管理は重要だと考えられる。そのためどのように管理をしているのか。
- ②山鉦の運営：毎年山鉦を登場させるには、人でも資金も必要である。そのため誰がどのような形で運営しているのか。また資金はどこから提供されているのか。
- ③伝統の継承について：祇園祭で登場する山ではお囃子も登場する。そういった技術はどのように継承されているのか。また巡行の際に辻回しなど、独特の山鉦の曳き方があると思われる。様々なハード、ソフトな面がどのように伝統が継承されているのか。

また、調査前にゼミで事前の勉強会を行い、その際に山田浩之編『都市祭礼文化の継承と変容を考える』を輪読した（本報告書 3 のレジュメ参照）。そこでは主にロバート・パット

ナムの「ソーシャル・キャピタル」論が扱われており、ゼミ生は「社会関係資本」の点から祇園祭の山鉾の運営を分析している。ここでいう「社会関係資本」とはいわば、金銭・物質的な見返りを求めない関係性とすることができるだろう。パットナム（2006）は著書『孤独なボーリング：米国コミュニティの崩壊と再生』で、アメリカのボーリング場での社交を事例に、そこに人が集まらなくなったことを通じて、米コミュニティの人間関係の希薄化を指摘した。日本の祭礼は名誉・威信といった用益、観光や学術など高く評価されるといった公共的用益性（武田 2019：87）、そのほか参加者のアイデンティティ、ボランティア精神など、さまざまな想いが複雑に絡み合い、それが関わりへのモチベーションとなっている。著者は以前にそういった祭礼の役割を人と人を媒介するメディアとして読み解いた（佐々木 2021）。今回はそれらを踏まえ、「祭礼における参加意識や伝統の継承が、「社会関係資本」の充実に左右される」というのが、佐々木ゼミのゼミ生の仮説となった。この点に注目しつつ本報告書の2の調査報告を読んでいただきたい。

調査を通じて、祇園祭が参考になった点についてまとめておく。

第一に、文化継承にかかわる組織づくりの重要性である。京都の山鉾を管理しているのは、必ずしも住民の人ばかりではない。山鉾が登場する場所がそもそもオフィス街であったりして、その保管は保存会にあつまるメンバーが決めている（例えば長刀鉾）。そもそも祭礼行事は、伝統的に地元の神社を祀る地域住民が中心に行われている。そのためその主体も住民およびそのネットワークになる。ところが、祇園祭の場合は必ずしも地域住民だけではなく、その地域にある企業が中心になることがある⁶。すなわち伝統を継承したいという人々が作る組織が重要であり、その母体は必ずしも居住地ではないといえる。

第二に住民は、祭礼の維持のための保管場所や会議場所などに理解があり、多くの場合、祇園祭に関わることが一つのシビック・プライドとなっていることである。こうした祭礼に関わることのアイデンティティは、自分たちだけの内部・伝統思考的なつながりだけでなく、外部に開かれたものとしても成立している。このプライドを醸成することは大きな意味を持つだろう。すなわちそこに関わること自体が榮譽であるという社会的文脈を作ることである。先に指摘した公共的用益をいかに高めるのか、どういった時に高まっていくのかという視点が重要になってくる。

第三に祭礼維持のための、資金集めの工夫がみられる。御朱印へのお賽銭、ちまき販売など様々な物品が売られているのはもちろん、協賛のための活動もさかんである。山鉾を管理する地域では、マンション入居も祇園祭にかかわることが前提となっている場合もある。特にコロナ禍において非常に憂慮されたのは、企業自体が予算の面から祭礼への参加を見合わせる事例が相次いだことである。企業である限り、会社の収益は第一に考えらるべきであろう。しかしながら、文化伝統が危機に瀕している時こそ、それを絶やさないという企業精神は価値が高く、危機を乗り越えたときに社会的な信頼を得ることも事実である。すでに各地域の祭礼は、そういった地元企業のバックアップなしには成り立たなくなってきている。その意味で、祭礼の持つメディア性をさらに考えていくべきであろう。

これらの調査から得た知見は、「青森ねぶた祭」の継承を考える上でも非常に参考になる。まとめで再度述べるが、最終的には祭礼を「街の宝、プライド」として、産官学連携して積極的にプロデュースしていくことが必要であろう。

3 京都にみる伝統文化の継承 2：京都の博物館・美術館

京都祇園祭における文化伝承について 7 月に調査を行ったが、その後 9 月に京都の文化・芸術継承に関する調査を、ねぶた師竹浪比呂央氏とともに行った。訪問先は下記の通りである。

●芸術・伝統文化保存調査

日時：2023 年 9 月 18～20 日

場所：京都市内

訪問場所：京都芸術大学、細見美術館、橋本関雪記念館など

聞き手：竹浪比呂央、佐々木てる、+1 名

語り手：京都芸術大学 空間演出デザイン学科 大野木啓人 教授

芸術教養センター 箭内新一 教授

白沙村荘 橋本関雪記念館 館長 橋本妙

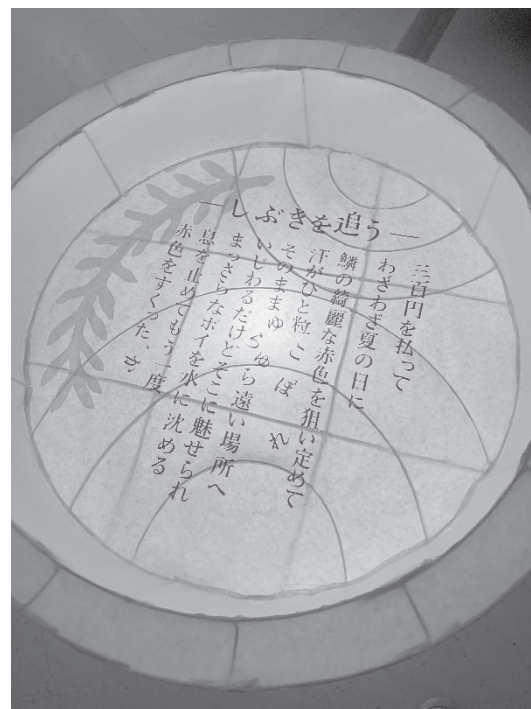
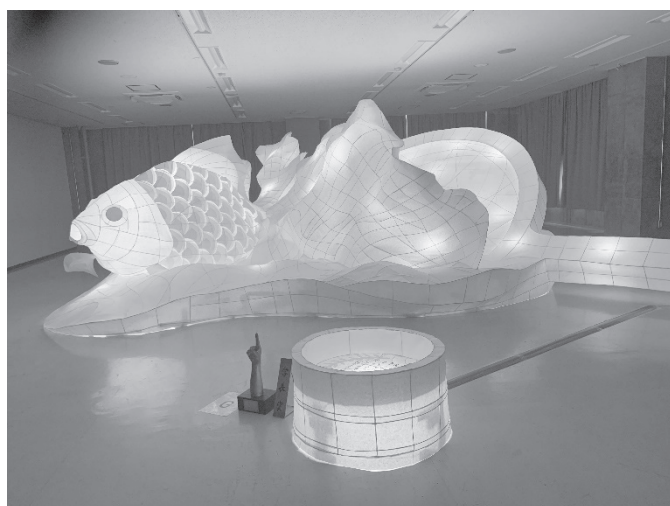
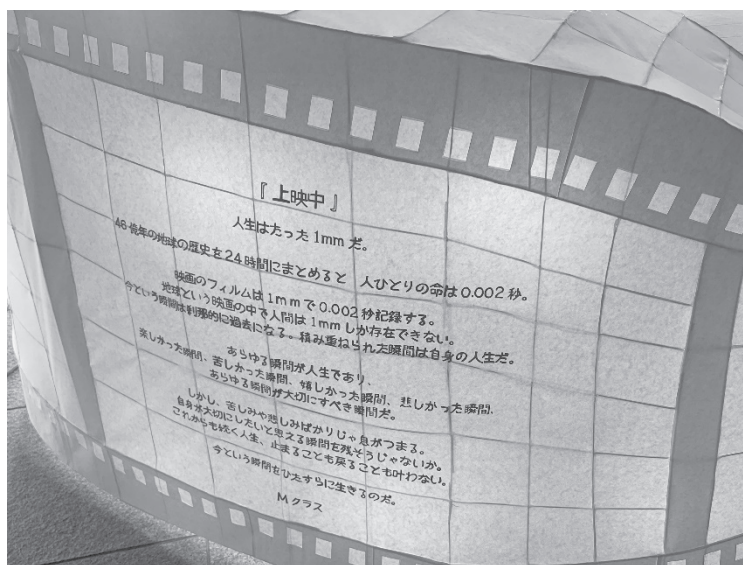
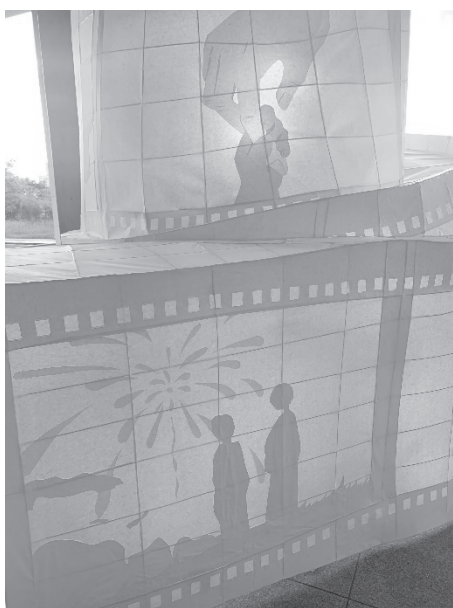
3.1 京都芸術大学

竹浪氏は京都芸術大学（旧京都造形大学）で、毎年 9 月に制作の授業を担当している。本年度も同様に行われ、学園祭をかねた成果報告会の展示をみることができた。以前にも紹介したが（佐々木 2022）、このねぶた制作はまったく色を着色しない、「白ねぶ



た」の制作、展示会であり非常に芸術性に優れている。これは新しい NEBUTA という芸術分野の創造であり、「紙と灯りのアート」として評価されつつある。京都芸術大学の本年度の「瓜生山ねぶた」の共通プロジェクトテーマは「1mm」であった。このテーマのもと白いねぶたが制作された。これは京都芸術大学の 1 年生向けのワークショップ型授業、通称「マ

ンデイプロジェクト」である。毎年、夏季集中期間に約2週間かけてねぶたが制作される。制作チームは学科をシャッフルして、20のチームで行う。それぞれのチームが自分達なりにテーマを解釈して、白いねぶたを制作していく。ここでは着色は一切認められていない。写真はその一例であるが、それぞれ独創性に満ちた素晴らしい作品となっている。青森でも以前「ねぶたアート創生プロジェクト」が行われ、青森市内のいたるところに多くの「白ねぶた」が飾られた。京都芸術大学ではそれが毎年、新しい作品をもって開催されているといえる。「ねぶた」が芸術としてのNEBUTAに発展している一例といえるだろう。



3.2 京都のミュージアム（博物館・美術館）

京都はこうした先進的な取り組みもあるが、周知のようにミュージアム（博物館・美術館）も多数存在する。その「収集・保存・展示」は素晴らしく、今回は橋本関雪記念館、細見美術館を訪問することができた。本研究の目的であるアーカイブ化という点から、調査で得た知見をいくつか指摘しておく。

第一に、今回訪問した美術館、記念館では収集、保存、展示のすべてが素晴らしく、まさに「芸術」と呼ぶにふさわしい作品が並んでいた。これは当たり前の事を言っているようであるが、その芸術性を創り出しているのは、作品に価値を置き、それを大切に扱う人々といえる。どんな作品もそれを評価し、愛する人がいなければ価値が高まらない。作品は制作者だけでなく、それを観賞する場や、人がいて成立するものであることを実感した。今後「青森ねぶた祭」に関する伝統を継承していくためには、こうした芸術的価値を高めていくことも重要である。逆にいえば芸術性が高まり、観賞したい人、評価する人が増えれば必然的にアーカイブ化はすすんでいくだろう。その意味で根本的な事に気づかされたといえる。

第二に運営についてである。こうしたミュージアムは運営がしっかりしている。もともと個人の所有物であった美術品が、ミュージアムとして展示され一般に公開されるようになったケースも多い。これは戦後日本の博物館法成立以降（1947年）のことであろう。ミュージアムの入場料はもちろんのこと、そこにレストラン、グッズ店などを併設することで運営を行っている。保存、館の維持費などについては今後また詳しく調査していきたい。

第三にこうした芸術作品を身近に感じることができるという点で、市民意識が高い点も指摘できる。京都の台所として有名な「錦市場」の店舗のシャッターには、伊藤若冲の画が描かれている。開店前に行かないと気付かないのだが、これは伊藤若冲が生前、錦市場の近くに住んでいたことに由来する。伊藤若冲（1716～1800）は円山応挙（1733～1795）やその弟子、長沢芦雪（1754～1799）といった画家とならび、京都の画壇の中でも日常における写生を重視した作品を残した日本画家といえる。いわゆる伝統的な日本画で有名な狩野派と比較され、むしろ常民文化的な画が多いのが特徴である。こういった絵画が地元のシャッターに描かれているのは、京都市民の文化に対する想いが伝わる。なお伊藤若冲の作品は細見美術館にて観賞する事ができた。

また今回訪問した白沙村荘 橋本関雪記念館は、橋本関雪の家族が運営している。白沙村荘とは実際に関雪が制作をしていた場所であり、関雪の死後、その場所が利用され関雪の作品の一部が展示されるようになった。風情のある日本庭園であり、こうした環境で作品が生み出されたことを肌で感じることができる場所である。現在の館長は橋本妙氏であり、多くの京都の文化人に慕われている方である。こうした血縁関係者によって、作品が後世に伝えられていることが京都の伝統であり、そのことは地域ブランドでもあり、シビック・プライドにもつながっているといえるだろう。

京都は歴史があり、もともと日本画などの文化の発祥地であるから当然である、と言う事

はたやすい。しかしながらそれを継承していくことは並大抵の努力ではないだろう。またこういった「地域×アート」という視点が近年では注目を集めている。最後に「地域×アート」の可能性をまとめとしておく。

まとめ：「地域×アート」の可能性

近年地域をとアートを結びつけることで、その地域の独自性が際立つケースがある。例えば、先日能登半島地震があった珠洲市で 2023 年に「大蔵ざらえ」というプロジェクトが行われた。ここでは地元の住民の協力で集められた民具を、専門家が調査し、アーティストが作品として使用するものであった。例えば、桶や糸車、蚕箔、蛸壺などといった民具である。これを、劇場型民俗博物館「スズ・シアター・ミュージアム」に運び展示するというものである⁸。そういった民具を集める際に、アーティストや研究者が各家々の「蔵（部屋）」に訪問するが、その蔵には「100 年、200 年の重さが全部」つまっていると表現する（REKIHAKU 2023：6）。こうした各地域にある「モノ」は文化であり、地域の財産となる可能性がある。こういった取り組みは、アートで地域を創造するプロジェクトだといえるだろう。

また青森においても、この「地域×アート」に関する報告が 2023 年 9 月 27 日（日）「棟方志功生誕 120 周年記念 棟方志功サミット in 青森」で行われている。そこでは東京中野区、岡山倉敷市、富山南砺市、青森青森市の四つの地域の報告がなされた。興味深かったのは、地元の文化的な特徴を「文化芸術資源」として活用し、街づくりの生かすという試みの報告であった。例えば、倉敷では街並み自体も一つのアートとして、景観を保護する取り組みを行っている。また富山南砺町では伝統芸能・祭礼が継承されており、また合掌造り集落の五箇山が有名である。これらを街の特色として売り出している。もちろん青森市自体も棟方ゆかりの地であることはもちろんのこと、青森市の西秀記市長からは「ねぶた×アート×地域」の可能性も示された。

さて本研究は伝統文化のアーカイブ化を目的として行っている。当初予定では、聞き取りを中心とした、語りのアーカイブの整理を中心に考えていた。しかしながら、各地の取り組み、そして地域の問題と照らし合わせると、こういった取り組みは大きなプロジェクトに繋がっていくことがわかった。すなわちアーカイブ化の取り組みは同時に、地域の独自性、創造性を促し、街自体の特徴を創り出していくことにつながるのである。街の独自性が提示されれば、それを目当てに多くの観光客が訪れ、経済的にも潤い、そして人が集まることによって、さらに伝統が継承されるというサイクルが生まれる可能性がある。2023 年度の研究においては、まだ具体的なアーカイブ化の動きは進められなかったが、調査の結果、進むべき方向性が見えてきたといえるだろう。次年度も継続して調査研究を行うことにより、より実践的に成果をだしていきたい。

註

- 1 詳しくは NTT 東日本の HP、「地域活性化にむけた取り組み事例」を参照してほしい (<https://business.ntt-east.co.jp/>)。特に文化財をデジタル化し、新しいアートの観賞方法をさぐっている取り組みとして注目される。
- 2 祇園祭デジタル・ミュージアム 2021ーバーチャルで楽しむ祇園祭ー (<https://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/vm/gionfestivalDM/>)
- 3 林広海制作 HP は『青森ねぶたミュージアム – 青森市文化芸術活動緊急対策事業』 (<https://nebuta-museum.com/>)
- 4 祇園祭で配布される資料「祇園祭 山鉾行事」(公益財団法人 祇園祭山鉾連合会制作のパンフレット)を参照した。
- 5 令和 5 年(2023 年)は 7 月 15, 16, 17 日の三日間にわたり行われ、街中の商店街、自宅、展示スペースなどで、12 の甲冑が展示されていた。
- 6 例えば、神田祭においては従来は住民が中心であったが、町会に多くの企業があるため、町会員の半分が法人会員といった場所もある。また丸の内町会エリアでは住民がほとんどいないため、地域の会社員が神輿を担ぐなどの参加がみられる(鈴木 2018 : 38-39)。
- 7 京都の博物館施設数は 200 以上といわれている。博物館施設とは歴史博物館や科学博物館をはじめ、美術館、資料館、動物園、植物園、水族館等を含む多種多様な施設をさしている。2024 年 1 月現在で、「登録博物館(博物館法 2 条に定められた施設。学芸員の配置や 150 日以上の開館などの規定がある)」は 19、「指定施設(博物館に相当する施設)」は 20、それ以外は博物館類似施設である。なお今回訪問した橋本関雪美術館、細見美術館は登録博物館である。京都市教育委員会の HP より。(参考 URL : <https://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000311276.html>)
- 8 奥野能登芸術祭珠洲の HP より「市民総参加型プロジェクト 珠洲の大蔵ざらえ」 (<https://www.oku-noto.jp/ja/okurazarae.html>)

参考文献

- 佐々木てる 2021「メディアとしての「ねぶた」～灯籠文化と山・鉾・屋台文化の祭礼比較の視点から～」佐々木研究室編『灯籠文化圏比較研究』pp.1-16
- 佐々木てる 2022『造形芸術としての「ねぶた」～富山県・北海道の行燈／京都瓜生山ねぶたとの比較から』
- 鈴木伸子 2018「都市祭礼とコミュニティのよりどころとしての祭り」地域構想研究所編『地域人 第 38 号』大正大学出版会
- 武田俊輔 2019『コモンズとしての都市祭礼：長浜曳山祭の都市社会学』新曜社
- テレコミュニケーション編 2020『地域活性化への文化・芸術のデジタル活用』リックテレコム

野田邦弘他 2020『アートがひらく地域のこれから』ミネルヴァ書房

REKIHAKU 2023『アートがひらく地域文化』国立民族学博物館

R・パットナム／柴内康文訳 2006『孤独なボーリング：米国コミュニティの崩壊と再生』
柏書房

山田浩之編 2016『都市祭礼文化の継承と変容を考える』ミネルヴァ書房

補足資料：2023 年度メディア・アーカイブ研究会報告 第1回～第3回報告

第1回 青森ねぶたメディア・アーカイブ研究会

日時：2023 年 5 月 13 日（土）16：00～18：00（16：15～17：45）

場所：アウガ 5 階 研修室

報告（話題提供）：ねぶた師 林広海

テーマ：伝統文化のアーカイブ化

1 問題提起：

青森ねぶた祭の現状として、口述資料など、多くの資料があるにも関わらず、保存ができていない。収集・保存・展示という機能が欠けている。これらのことによって、多くの人が「青森ねぶた祭」に関して調べることが困難になっている。これは同時に伝承が困難になっているといえる。またここでいう情報とは「語り、書籍、新聞、論文、映像、画像、実物」などすべてをさす。

2 今回出た中心的なアイデア

- ・画像を中心にまとめてはどうか。

3 画像データはどこにあるか

- ・画像データ DVD など（1991 年ごろ～） ・印刷会社に画像データあり
- ・ねぶた師が持っている資料 古いデータ（ねぶたこへ時代から）が得られる
- ・民間から出たもの ・あおもり草子（プリズム） ・あおもりの木（ものの芽舎）
- ・月刊キャロット など。

4 どのように整理するか

- ・誰がいつ撮ったものか（時系列）を照らし合わせて整理していく。
- ・SNS を活用する。 ・市民から情報を集める。
- ・ワラッセのアーカイブとつぎあわせる

第2回 青森ねぶたメディア・アーカイブ研究会

日程：2023 年 9 月 23 日（土）16：00 開場（16：15～18：15）

場所：アウガ 5 階 研修室

テーマ：サイト運営について

1 青森ねぶたミュージアムのサイトについて

- ・ねぶたリサーチ

昭和 19 年から検索可能（課題：もっと前の年代からあるが、データが存在しない）

- ・アーカイブ

手持ちのねぶた画像が誰でもアップロード可能

現在の課題・容量があるため、画像のサイズ・枚数に制限あり

- ・年代などの詳細の特定が大変

- ・跳人衣装のデータが少ない→跳人衣装を保管している人は沢山いる。

- ・ねぶた学

各統計（制作者—台数など）を横断的にグラフで閲覧できる

- ・じゃわめぐ

お気に入りねぶたの運行や歴代ねぶたへの投票、ねぶた馬鹿検定などゲーム感覚で楽しめるコンテンツ。将来的には、コンベンション協会や市役所などの機関と連携をとっていきたい（運営費の問題）

- ・意見：ねぶた初心者向けのサイトも必要なのではないか

2 サイト構築の実現に向けて

立命館大学アートリサーチセンターを事例として写真・動画を整理する

例）青森公立大学メディア・リサーチセンターを考える、

青森公立大学地域連携センター／図書館との連携は可能か？

課題）①画像提供（コレクション化している）

②著作権問題

③保存スペース

第3回 青森ねぶたメディア・アーカイブ研究会

日時：2024 年 1 月 6 日（土）16：10~18:30

場所：アスパム 9 階 会議室「津軽」

報告（話題提供）：ものの芽舎 佐藤史隆さん

テーマ：「あおもり草紙」から「あおもりのき」で使用された写真などについて

1 刊行物

あおもり草子 1979（昭和 54）年号~2019（令和 1）年 計 41 冊刊行

季刊あおもりのき 2020（令和 2）年号~2023（令和 5）年 計 4 冊刊行

2 版下データ

2006（平成 18）年号（あおもり草子 169 号）まで版下なし

2007（平成 19）年号（あおもり草子 176 号）～（11 年分）

2018（平成 30）年号（あおもり草子 252 号）～（2 年分） → 完全データあり

2020（令和 2）年号（季刊あおもりのき）～（4 年分） → 完全データあり

3 写真ストック

ポジフィルム

1983（昭和 58）年～1985（昭和 60）年（3 年分）編集部撮影

1986～1990 年：なし

1991（平成 3）年～2001（平成 13）年（10 年分）編集部撮影

2002～2007 年：なし

デジタルデータ

2008（平成 15）年～2018（平成 30）年（11 年分）

2014 年：雨の日少しのみ

2019 年：腰痛で撮影なし

2020 年：中止

2021（令和 2）年 代替イベント

2022（令和 3）年～2023（令和 4）年（2 年分）

4 写真家撮影写真

あおり草子は、基本的に写真家の撮影写真を掲載し、編集終了後に写真を返却している。

写真の一部→竹浪比呂央ねぶた研究所へ寄贈されている。

5 課題

- ・古い写真を引き出すのが大変→スキャンにも時間と手間がかかる
- ・肖像権の問題：肖像権は本人のみに帰属する一身専属権（本人の死亡とともに消滅する）
- ・「ねぶた風景」とはどこまでが風景として許容されるのか
- ・そのほかの意見：「原稿もアーカイブとして残すべき」

例）あおり草子...写真以外にも貴重なコラムが掲載されている

時代ならではの表現がされている→ねぶた祭の流行の推移が分かる

6 今後の活動について

①アーカイブ現物の保存場所について検討する

→公立大学といった教育機関が良いのでは

②関係者で話を聞きたい人がいたら、情報提供を

③写真展開催

2 京都祇園祭調査

～祇園祭の保存・継承実態について～

地域みらい学科 2 年 佐々木ゼミ

阿部仁菜 伊藤源大 内海空 鳥山凌空
松田優唯 中野ありす 吉田翔太

目次

はじめに

- 1 理論枠組み：R.パットナムのソーシャル・キャピタル論
- 2 屏風祭とは
- 3 長刀鉾
- 4 船鉾
- 5 蟠螂山
- 6 山伏山
- 7 函谷鉾
- 8 結論：比較分析

おわりに

はじめに

本論文の内容は、近年、人口減少や少子高齢化の影響に加え新型コロナウイルスによる活動制限が拍車をかけ、祭りの継承者不足の問題が懸念されている。そこで私たち佐々木ゼミは伝統文化の保存継承およびアーカイブ化に着目し祭礼の実態調査を行うことにした。調査対象を古くから行われている京都祇園祭とし、祇園祭ではどのように祭りや山鉾を保存し継承しているのか実態を調査してきた。この論文ではその調査報告および分析・考察に加え、京都祇園祭と青森ねぶた祭をソーシャル・キャピタルの観点から比較したものとなっている。

先行研究として山田浩之『都市祭礼文化の継承と変容を考える～ソーシャル・キャピタルと文化資本～』を読み、組織の関係性を社会関係資本から分析する視点を学んだ。

現地の調査では 3 つの班に分かれ、祇園祭の前祭りで巡行する山鉾全 23 基を見てきた。その中でも数基の山鉾保存会やその関係者に保存、継承実態の聞き取り調査を行った。

本論文では、初めに各班で調査した山鉾の概要について説明し、続いて、聞き取り調査を行った山鉾について、誰がどこにどのように保存しているかの保存実態に加えて担い手不足の中、どのような方法でこれまで受け継がれてきたのか、継承実態についても調査結果を報告する。最後に考察において、各山鉾屋台の比較分析と青森ねぶた祭と京都祇園祭を先行研究のソーシャル・キャピタル的な視点で比較分析することにする。

1 理論枠組み：R.パットナムのソーシャル・キャピタル論

佐々木ゼミでは現地調査を行う前に、山田浩之編著『都市祭礼文化の継承と変容を考える』をテキストとし、都市祭礼文化の理論的視座について学んだ。その際に R.パットナムのソーシャル・キャピタル論を学ぶことができた。そこで、本調査の分析ではパットナムのソーシャル・キャピタル論の分類方法を参考にすることにした。

まずソーシャル・キャピタルとは社会関係資本のことである。これを自分たちの言葉におきかえて、「人と人との間に生まれる絆」として理解した。パットナムの定義としては、「協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼、規範、ネットワークなどの社会的仕組みの特徴」のことを指す（Putnam1993:167＝稲葉 2016：20）。ここでのネットワークは、人や組織の間に醸成される信頼と規範を指す。また、ソーシャル・キャピタルには三つの型というものがある（図 1）。一つ目の背景の共有についてである。同じ背景を持つもの同士を結束型・異なる背景を持つもの同士を橋渡し型に分類できる。二つ目はヒエラルキーの有無についてである。メンバーの関係が上下関係にあるものを垂直関係、メンバー関係が同等であるものを水平関係に分類できる。三つ目は第三者との関係についてである。グループ内のみコミュニティを閉じたネットワーク、外部や第三者と結び付くコミュニティを開かれたネットワークと分類できる。

この分類をもとに、それぞれの山鉾屋台の町会が、どのようにその文化を継承しているのかを分析してみた。

背景の共有		ヒエラルキーの有無		第三者との関係	
結束 (背景 同 じ)	橋渡し (背景 別)	垂直	水平	閉じた	開かれた

(図 1：パットナムのソーシャル・キャピタルの分類図)

2 屏風祭とは

屏風祭は祇園祭に花を添えるもので、かつて各商家で秘蔵する屏風を人々に見せる一年に一度の機会であった。屏風祭で人に見せるという習慣がいつから始まったのかは不明のようだが、古くから祭りのときに屏風を飾り、その前で祭り見物が行われていたそう。現在では山鉾町に限定された行事として、屏風や鉾の模型、染織品、檜扇と呼ばれる生け花などを展示している。屏風と檜扇がセットで置かれているのが屏風祭りの特徴といえる¹。右の写真1は船鉾に訪問した際に行われた、「長江家」の屏風祭であった。母屋には多くの貴重な提示品が並べられていた。



(写真1)

そのほか、訪問した放下鉾の屏風祭りでは、会所にて胴掛や骨董品などが展示されていた(写真2)。また、鉾が開放されて

いて上に登ることができたが、放下鉾は文化財であるため、しきたりを継承し、女性が鉾の上にあがることは許されていなかった(写真3)。



(写真2)



(写真3)

3 長刀鉾

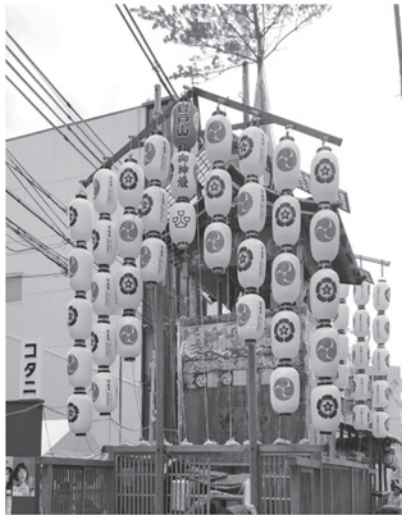
まず私たちの班(伊藤/吉田)が訪問した山鉾屋台とそのご利益は以下の通りである。①保昌山(ほうしょうやま):ご利益は縁結び(写真4)、②綾傘鉾(あやがさぼこ):ご利益は縁結びと厄除け(写真5)、③岩戸山(いわどやま):ご利益は開運(写真6)、④白牙山(はくがやま):ご利益は疾病除け・技芸向上(写真7)、⑤白楽天山(はくらくてんやま):ご利益は学業成就(写真8)。なお今回は長刀鉾(なぎなたぼこ)を中心に紹介していく。



(写真4 保昌山)



(写真5 綾傘鉾)



(写真6 岩戸山)



(写真7 伯牙山)



(写真8 白樂天山)

3.1 長刀鉾

長刀鉾と名付けられた由来は鉾先に取り付けられている大長刀が由来とされている。この鉾は別名「くじとらず」と称され毎年必ず巡行の先頭と決められている。応仁の乱の時に一度中止になったが、1500年に復活を果たした。鉾頭に飾られている長刀は元々三条小鍛冶宗近(さんじょうこかじむねちか)作が用いられていたが、1522年には三条長吉(さんじょうながよし)作のものが用いられ、1675年以降には和泉守来金道(いずみのみらいかねみち)作が飾られていた²。しかし、落下の恐れがあることから現在はそれらの長刀は蔵に保管され複製品を鉾頭としているのである。保管されている長刀は世界で一つの物であるため、文化省からは出さないように言われている。ちなみに長刀の刃先は御所つまり八坂神社に向かないように設置されている。

次は厨子という部分について解説していく。厨子「天王座」には和泉小次郎親衡(いずみこじろうちかひら)の人形を祀っている。この和泉小次郎親衡は大力に任せて舟をたずさえ山を越えた後、その舟を使って川を下ったという伝説がある人物である。そのため、天王座には親衡(ちかひら)の舟を背にし、長刀を持った人形が祀られているのである。23 cmの高さの木彫彩色仕様の守護神人形であり、別名「天王さん」で人々から親しまれている³。

長刀鉾の保存実態について述べておく。長刀鉾町内では昔、分解した鉾の部品や装飾品などを町内の人々がそれぞれ持ち帰っていた。しかし、現在は町内が保有している建物の中ですべての部品を保存しているのである。公益社団法人長刀保存会が保存主体となっている。建物の室温は、部品にカビが生えないようにクーラーによって常に20℃になるように保たれている。現在、建物内に保管されている鉾の部品は2000~3000種類あり、それらは全てコンピュータで管理されている。クーラーなどでかかる保存費や運営資金はすべてではないが町内周りの企業から出してもらっている。

長刀鉾の継承実態であるが、まず囃子方は太鼓4人、笛20人、鉦16人で構成されており、巡行時には交代要員も入れて総勢60人いる。お稚児様に関しては、近年、各町内は子供がいないまた、お稚児様として子供を出すのにもお金がかかるという理由からお稚児は人形になってしまっていることが多いが、長刀鉾は人間(10歳の男の子)が担っている。

巡行関係者については、まず音頭取という曳き子の指揮者がいる。これは、ねぶたで言う扇子持ちの役割である。建て方はマニュアルをもとに鉾を組み立てて鉾全体を造る役割の方がいる。ちなみにこの役割は音頭取と屋根方を兼任する。次に車方、鉾の巡行とつじまわしを行う役割である。4つの車輪がある鉾に対して一つの車輪に3人つまり12人つくことになっているのである。最後に屋根方、4人で屋根の上に乗って揺れの調整や障害物を防ぐ役割がある⁴。これらの役割とその他関係者を総計すると鉾一台に対して約200人関わっている。ただしこれらの役割は、現在町内にはほとんど人が住んでいないため、過去に町内に住んでいた住人の方々やお稚児さんとして出ていた方々が主体となって動いている。

3.2 長刀鉾の保存継承の分析および感想

これらのことを前提として、最後に長刀鉾の保存継承について分析と考察を行っていく。
まず長刀鉾町には住人がほとんどいない。つまり、長刀鉾の主体は過去の関係者やお稚児さんとして参加した人に限られている。そのため、ソーシャル・キャピタル的視点から見ると、過去に参加したという同じ背景を持つことから、**結束型**がみられる。また、資材方代表など長年携わるうちに重役が任されるようになり生まれる上下関係のようなヒエラルキーから、**垂直的特徴**も見られる。さらに長刀鉾町というグループのメンバー間のネットワークが築かれていることから**閉じたネットワーク**という3つの特徴がみられる（山田 2016）。

これらのことを考えると将来的に考えられるのは現在、主体となって携わっている方々が高齢化の影響により一線を退いた場合、継承者が減っていく一方だということである。そのため、その他町会や地域周辺企業・教育施設といった第三者・団体との関わり合いを今以上に増やしていく仕組みづくりが求められているのではないかと推測した。

最後に今回の調査の感想としては、朝方に調査に向かったこともあり、前祭（さきまつり）の準備の様子や鉾を立てている様子など、貴重な現場を見学することができた。青森のねぶた祭と京都の祇園祭、由来や山車、地域 保存継承問題などそれぞれに違いはあるが、そこに関わる関係者の思いの熱さというものは共通していると感じた。

4 船鉾

4.1 由来

はじめに船鉾（ふねこ・写真 9）の由来について報告する。由来は日本書紀の神功皇后が題材になっている。神功皇后とは、安産の神とされており、巡行時には岩田帯をご神体に巻き、祭りの後には安産御守として妊婦へ授与されている。また、長年着用していたご神体の裂を御守として授与している。

鉾全体の形は船の形をしており船首には金色の鶴と呼ばれる伝説の鳥を、船尾には「黒漆塗螺鈿の飛龍紋様」（写真 10）の舵をつけている。船端には朱漆塗の高欄をめぐらし、唐破風入母屋造の屋根からは紅白の長旒、吹き流しをひるがえしている。鉾の上には神功皇后を陪従する磯良、住吉、鹿島の三神像を安置している⁵。また、巡行順は「くじとらず」とされており応仁の乱以前から最後まで決まっている。



（写真 9 船鉾）

4.2 保存

船鉾の保存は公益財団法人船鉾保存会が主体で行っており、メンバーは町内会が中心になっている。保存場所は町内にあり、鉾を部品ごとに分解して保存している。管理の方法は、

鉾を数段階に分解し、撮影それを 3D 化し管理している。データ管理を立命館大学が中心となり行っている。継承についてであるが、船鉾ではマネジメント以外は外部委託している。例えば囃子方は町内の人ではない別組織で構築されており、町外から技能者を呼んでいる。練習は2ヶ月に一回程度行っている。また、曳き手もボランティアやアルバイトを募っている。



(写真 11 黒漆塗螺鈿の飛龍紋様)

4.3 考察

船鉾ではマネジメント以外を外部委託しており、町内だけでなく第三者・団体との関わりが多いことが判明した。これは、ソーシャル・キャピタル的視点から見ると、外部委託で異なる背景をもつ人々が集まっていることから橋渡し型であることがわかる。また、外部の第三者との結びつきが強いことから開かれたネットワークだといえる。外部とつながることに積極的と言える一方で、曳き手はボランティアを募るなど人材不足が否めないという側面もあることが分かった。これからはより立命館大学との連携を強めることが重要と考える（山田 2016）。

感想だが、私が今回注目したのは祇園祭の鉾に装飾されている模様などの繊細さだ。そこに迫力というより美しさを感じた。また、祇園祭に携わる人々との交流を通して、そこでしか得られない知識や考えを得られたので今回の経験は刺激的なものになった。

5 蟬螂山

まず私たちの班（吉田・中野）が訪問した山鉾屋台の概要について説明する。①芦刈山（あしかりやま）：謡曲「芦刈」に基づく芦刈山は、わけあって妻と離れてしまった翁が芦を刈り、やがて妻との再会をはたす夫婦和合（わごう）の姿をあらわしている。ご利益は夫婦和合、縁結びである（写真 12）。②木賊山（きぞくやま）：謡曲「木賊」に由来する木賊山は、我が子を人にさらわれて、一人 信濃国伏屋の里で木賊を刈る翁をあらわしている。ご利益は、迷子避け、再会である（写真 13）。③油天神山（あぶらてんじんやま）：油小路通にあり、天神 菅原道真公を祀っている。菅原道真ということで、ご利益は学業成就である（写真 14）。④郭巨山（かつきょやま）：中国の史話「二十四孝」の一人「郭巨」の釜掘りの故事にちなんで造られ、別名「釜掘り山」とも言われている。二十四孝は親孝行の話であるため、ご利益として金運や母乳の出を守ることがある（写真 15）。⑤放下鉾（ほうかぼこ）：町角で芸を披露しながら仏法を説く放下僧を祀る鉾です。かつては「生稚児」であったが、昭和4年以降は稚児人形に替えられた。生稚児同様、稚児舞ができるようにつくられている特徴がある。ご利益は厄除け、疫病除けである（写真 16）。⑥太子山（たいしやま）：誕生してから今日までの聖徳太子をお祀りしている。聖徳太子が四天王寺を建立した際、自ら山に入っ

て良材を探し求めた言い伝えに基づいて、他の山が真木として松の木を立てているのに対し太子山は杉の木を立てているのが特徴である。ご利益は聖徳太子に由来し、知恵、学業成就、和の心である（写真 17）。⑦四条傘鉾（しじょうかさぼこ）：織物の垂りなどをつけた傘と棒ふりばやしが巡行する古い鉾の形態である傘鉾の一つで、応仁の乱以前に起源をもち、傘の上には若松が飾られている。ご利益は招福である（写真 18）⁶。



（写真 12 芦刈山）



（写真 13 木賊山）



（写真 14 油天神山）



（写真 15 郭巨山）



(写真 16 放下鉾)



(写真 17 太子山)



(写真 18 四条傘鉾)

5.1 蟬螂山（とうろうやま・写真 19）について

私たちは 2023 年 7 月 15 日土曜日・京都祇園祭 前祭開催中に、蟬螂山町の保存会ブースで聞き取り調査を行った。お話ししてくださったのは、蟬螂山保存会 常任理事である岡部正宏さんで、調査者は佐々木、吉田、中野が行った。

蟬螂山は「蟬螂の斧を以って隆車の轍をふせがんと欲す」という中国の故事にちなんでいる。この中国故事は、蟬螂が前足を振り上げて大きな車に立ち向かうことや自らの力も顧みずに強者に歯向かうことを意味している⁷。蟬螂山の蟬螂は由来となった故事である『蟬螂の斧』を表現しており、その起源は南北朝時代、蟬螂山町に住んでいて、足利義詮軍に挑んだ四条隆資という一人の公卿の戦いぶりが蟬螂の斧、つまり「カマキリの鎌」のようであったことから、1367 年（永和 2 年）に四条家の御所車に蟬螂を乗せて巡行したのが始まりだと言われている。このことから厄除け、疫病除けのご利益がある⁸。

蟬螂山の特徴は、山鉾の中で唯一「からくり」（写真 20）が施されていることだ。巡行の際に御所車に乗っている蟬螂の頭や鎌、羽の部分、御所車の車輪がからくり仕掛けで動く。蟬螂山は江戸時代（享保の時代で年代は定かではない）にからくり山となったので、それまでの蟬螂山はからくりが施されていなかったということが分かる。江戸時代に、からくりを施し、動くようにしたら面白いのではないかという提案で、当時名古屋に住んでいてからくり師である玉屋庄兵衛さんに来てもらい、蟬螂にからくりを施してもらった。それから毎年祭りの時期になると玉屋庄兵衛さんが名古屋からやってきて整備を行っているそうだ。現在は 9 代目が 10 代目に指導するという形で継承をしつつ、蟬螂のからくりの整備が行われている。

もう一つの特徴として、蟬螂山は担ぎ山であるため、囃子方がないという点が挙げられる。



(写真 19 蠮螋山)



(写真 20 蠮螋山のからくり)

5.2 蠮螋山 年表

・南北朝時代	(1292~1352)	四条隆資の戦い
・永和 2 年	(1376)	四条家の御所車に蠮螋を乗せて初めての巡行
・江戸時代	(17??)	からくり山となる
・元治元年	(1864)	禁門の変、元治の大火により消失、中止
・昭和 56 年	(1981)	町人の情熱と努力により 117 年ぶりに再興 現在に至る。

由来の所でも述べたように、南北朝時代、四条隆資の戦いの様子が蠮螋の起源とされている。その戦いをもとに永和 2 年 (1376 年) に御所車に蠮螋を乗せての初めての巡行が行われた。そして詳しい年代は不詳であるが、江戸時代 (享保の時代 1700 年代) にからくりが施された蠮螋山となる。元治 (げんじ) 元年 (1864 年) 禁門の変の際の元治の大火によって蠮螋山のほとんどが焼失してしまう。ここで言う禁門の変とは「幕末における長州藩を始めとする攘夷派と薩摩藩、会津藩をはじめとする対抗勢力による争い」のことを言う⁹。禁門の変によって、そこから 117 年間中止となってしまうが、1981 年 (昭和 56 年) に町人の努力と蠮螋山に対する情熱によって 117 年ぶりに再興され、現在に至る。

5.3 蠮螋山の保存

①保存主体

蠮螋山の保存主体は蠮螋山保存会になっている。他の山鉾と違い公益財団化はしておらず、町会主体であるというのが特徴である。蠮螋山町の世帯数はもともと 10 世帯をきっていたが、マンションが 3 つ建設されたため、現在では約 350 世帯になり山鉾町の中で一番多い。保存会の役員は、マンション住民で構成されており、蠮螋山を目当てに引っ越してくる人もいる。そして、主体である蠮螋山保存会では月に一回第二土曜日に定例会が行われているそうだ。特に祭りが近づくと警備について話し合われる。それは蠮螋山のある通りは車が通るため通行止めが出来ず、蠮螋山がある西洞院通り (にし の とう い ん ど お り) が大通りへ通り抜ける唯一の通りだからである。祇園祭の期間中は特に人どおりが多いため、円滑な交通と観

光客の安全を守るため交通整理や警備などの強化が必要なのだそうです。

②保存場所

蟬螂山の保存場所は八坂神社の蔵とマンション一階の蔵の 2 つに分かれている。骨組みなど大きな部品は八坂神社にある蔵に保存しており、それ以外の角金具や装飾品などはマンション一階にある蔵に保存してある。蟬螂山町にマンションは合わせて 3 棟あり、それぞれの一階に展示スペース、町会所、保存会兼蔵がある。これらの場所を設置したかった町と都市化に伴うマンション建設の交換条件として設置されたそう。

5.4 伝統継承

①住民の役割

蟬螂山の伝統継承の 1 つとして、マンション住民の存在は不可欠である。マンション住民には「役員」としての役割がある。蟬螂山の役員は住民が担っており、主体となって運行している。蟬螂山本体に関しては山の組み立てから、巡行、解体までを行っている¹⁰。これも住民の役割のうちの一つである。この際、組み立てや解体には建築会社に関わっており、この企業は祇園祭の山鉾の修復や組み立てにも携わっていて 100 年もの歴史を持つ企業である。このように地元企業と住民が協力しながら組み立てや巡行、解体を行っている¹¹。

ちまき作りも住民の役割の 1 つである。毎年祭りが近づくと、住民が集まり、ちまきづくりを行っている。岡部さんのお話によると今年は例年より、ちまきに数が少なかったそう。これは材料である笹が鹿に食べられてしまったことで材料不足になったのが原因だということだ。このように、マンション住民が役人、巡行、ちまきづくりといったことを代々受け継ぎ、後世へと引き継がれているのだと考えられる。

②住民の思い

伝統継承における住民の思いという面から考えていくと、山鉾における伝統継承について、住民の役割を代々受け継いできたことだけではなく、住民の山鉾巡行に対する思いや意志があったからこそ山鉾巡行が現在まで続いているのだと考えられます。岡部さんの話では、「祇園祭は神事であるものの、役人たちの『俺の所はこんなに立派なもの（山鉾）を持っているんだ』といういわゆる見栄の張り合いや山鉾に対する誇りがあったからこそ現在まで続いているのではないか」とおっしゃっていた。

また、住民の意志という点からも、「神事これなくとも山鉾渡したし（神事はやらなくとも、山鉾巡行はやらせてくれ）」という京都で有名な言葉があるが、この言葉は昔、一揆の影響で当時の幕府に神事の禁止令を出された際、神事が行われぬまま、山鉾だけが巡行された年があった際に生まれた言葉である。このような出来事を受け、この言葉は京都の住民の祇園祭にかける心意気として現在まで語り継がれているという¹²。

③継承・アーカイブ化

蟬螂山は幕末以前に角金具、胴掛などの飾り物や車輪などほとんどを売ってしまったため資料が少ないことが課題となっている。なぜ売ってしまったかの記録も残っておらず、おそらく当時町で金に困っていたから売ってしまったのではないかと岡部さんはおっしゃっていた。売ってしまったものは他の山鉾が買い取っていたり、一般人の方が買い取ったりと行方は把握しきれていないのが現状だった。

また、幕末前におきた 禁門の変・いわゆる元治（げんじ）の大火の時に京都の町が焼けてしまい、蟬螂山町も焼けてしまったため幕末以前の記録や史料が残っていない。

ただ、現代になりたまたまオークションなどを通じて蟬螂山の角金具を見つけて買い戻したということもあり、その中には当時売ってしまったものが返ってきたというケースもあったそうだ。ちなみに当時のオークションでは約 100 万円相当のものもあったそうだ。売ってしまった蟬螂山の備品を他の山鉾が買い取るなど他の山鉾との交流もあったが、蟬螂山として史料や記録が残っておらず何を伝承できるのかわからず、ノータッチとなっているため、蟬螂山において継承・アーカイブ化については非常に弱いと言える。

5.5 分析・考察／調査の感想

継承・アーカイブ化に関しては非常に弱い蟬螂山だが、他の山鉾町と比べ一番世帯数が多いことや、蟬螂山のファンが多く蟬螂が好きあまり引っ越しをしたいと思う人も多いことから関係人口と定住人口が多いことがわかる。また、祇園祭を観にくる観光客も多いので交流人口も多いと言える。よって、住民が主体となっている点で背景が同じもの同士で組織されていることから、結束型のソーシャル・キャピタルが存在していると言える。

また蟬螂山は人の目につきやすい環境に置かれていることから、蟬螂山を知ってもらう環境は整っている。よってあとは彼らに継承してもらうことで、蟬螂山は今後も続いていくと考えられる。今後さらに伝統文化を継承させていくにはおじいちゃん、おばあちゃんから当時のはなしを聞く機会を設けるなど、口頭で言い伝えられている情報をデジタルアーカイブさせて、後世に残していくことが重要だ。またアーカイブした情報を動画などにまとめ、町の小中学校での郷土教育に活用することに加えて、各種 SNS 等での発信や展示場での見せ方の工夫を行うなど、現段階で分かっている史料をリアルとデジタルの両方で残していくことも同時に重要であると考えられる。

蟬螂山の担い手は都市化に伴い建てられたマンションの住民であり、昭和から平成、令和と新しい世代による新しい形に移り変わってきたように今後もマンションの住民を中心に受け継がれていくと考えられる。

最後に蟬螂山の調査を経ての感想として、祇園祭を通して京都市民の巡行に対するあつい情熱を感じることができた 1000 年も昔から続くこの祭を令和の今の時代でも受け継いで巡行しているのは「神事これなくとも山鉾渡したし」という言葉が多くの人々の心に響いているからだと思う。そして聞き取りをしている上で、会話に登場する年数や歴史が平安時代から

出てきて、古すぎて感動したのと、皆さん大変記憶が良いなと思った。急にインタビューしてもこれだけの情報が出てくるのはやはり祇園祭や蟬螂山に対して深い愛情を抱いている人が多いからだと感じた。そして蟬螂山の最大の特徴であるからくりについても驚いた。からくりじたい普段目にすることも少なかったので電力を使わずにカマキリや車輪を動かす技術はまさに日本の神業であると感じた。

禁門の変で焼けてしまったのにも関わらず、再興させ、現在まで続いているということは、それほどに蟬螂山町の住民の巡行にかける思いが強いのだと感じた。この思いの強さがこれからの世代に引き継がれ、伝統継承がおこなわれていってほしいと思った。

6 山伏山

まず私たちの班（阿部、松田、内海）が訪問した山鉾屋台を紹介する。次に調査を行った山伏山および函谷鉾について説明する。なお、函谷鉾については 2023 年 7 月 16 日に函谷鉾保存会運営関係者の方からお話を伺った（担当：内海、阿部）。

訪問した山鉾屋台について。①鶏鉾（にわとりぼこ）：中国の唐の時代に天下が良く治まり、訴訟の時に打つ太鼓に苔が生え、そこに鶏が巣を作ったという平和な説話が由来である。よって、ご利益は厄除け・疾病除けである（写真 21）。②占出山（うらでやま）：神功皇后が新羅遠征の前に鮎を釣って、戦勝のしるしとしたことが由来である。よって、ご利益は安産・勝運である（写真 22）。③孟宗山（もうそうやま）：病気の母を養う孟宗という人が雪の中で筍を振り当てた姿が由来である。よって、ご利益は親孝行である（写真 23）。④霰天神山（あられてんじんやま）：大昔に京都で大火事があった時に降った霰によって火が消え、その時一寸二分の天神様が降ってきたことが由来である。よってご利益は、雷除け・火除けである（写真 24）¹³。



（写真 21 鶏鉾）



（写真 22 占出山）



(写真 23 孟宗山)



(写真 24 霰天神山)

6.1 山伏山由来・解説

山伏山（やまぶしやま・写真 25）の由来と解説を述べる。山伏山は山に飾る御神体（人形）が山伏（山に伏して修行する修験者）の姿をしていることからこの名前がつけられた。山伏山は昔、法観寺の五重塔（八坂の塔）が傾いたとき、法力によってそれを直したいという浄蔵貴所という高名な修験者（山伏）の大峰入りの姿を表現している¹⁴。なお写真 26 は山伏たちが、祇園祭山鉾巡行（前祭）の安全を祈願する「祇園祭山伏山護摩焚き（ごまだき）」をする前にほら貝を吹きながら町内を巡りに行く様子である。



(写真 25 山伏山)



(写真 26 ほら貝)

6.2 保存会構成員・ボランティア

町内の住民と町内に事務所を構えている会社で構成されていて、全てボランティアで行っ

ているそうだ。7月17日は12人くらいで山を引くので若い学生にお願いしている。また、山伏山は同志社大学のラグビー部の学生たちがボランティアで来るという。たまたま建設会社大林組の社員が同志社大学のラグビー部だったので、現役の学生たちにお願いし、そのつながりは6〜7年頃前から続いているそうだ。また、町内会で役割分担をしていて建設会社大林組の方々は若く力のある人が多いので山の組み立てを担当している。山全体の保存についてであるが、山伏山に「公益財団法人山伏山保存会」があり、ここで様々な業務を行っている。なお、保存場所は山伏山が所有している倉庫である。

6.3 山伏山の継承と保存方法／考察・感想

次に運営資金調達について述べる。運営資金調達は住民からは町内会費程度しか集めておらず、あとは山伏山で売っているちまきなどの物販の売り上げと国（文化庁）からの補助金で賄っているそうだ。

次に山伏山の継承実態について述べる。山の組み立てのマニュアルは存在しておらず、見よう見まねで山の組み立てを行なっている。継承のために新しい人を入れるというよりも、今いるメンバーでやっている体制である。若い人に関しては会社に入社したり、大学生がボランティアとして参加していたりするので困ってはいないようなのだが、マンションが少なくなってきたり、それによって全体の人数が少なくなってきたりするので、継承が容易ではなくなってきたりしている。

山伏山調査から分かったのは次の点である。山の伝承マニュアルが存在していなかったり、SNSを運用していなかったりしている点から、承継の体制が整っていないように感じる。しかし山伏山では山の組み立ては口頭で代々受け継がれてきており、逆に言えばつながり・絆といったソーシャル・キャピタルが強く、コミュニケーションが活発だからこそマニュアルもなく受け継ぐことができていると考えられる。だが、口頭で受け継がれているため、もし把握している人がいなくなってしまう場合には伝承が困難になってしまうのではないかという懸念点がある。祇園祭の他の山鉾団体は、SNSを運用していることが多いようである。したがって、つながり・絆といったソーシャル・キャピタルを保持しつつ、積極的にSNSを運用したり、伝承マニュアルを作成したりして山伏山の伝統を継承していく体制を整えていくべきであると考えられる。

山伏山の聞き取り調査では、山の保存や保存会の構成員、資金調達、継承実態についてだけではなく、町内同士の関係についてなども学ぶことができた。特に、他の山と違って専門の大工の方が山を組み立てるのではなく、町内の建設会社の社員が、マニュアルがない状態で見よう見まねで山を組み立てているという話が印象に残った。また、くじ取り式で「最後にくじを引いたのにもかかわらず山一番になった」という話を聞いて、とても縁起が良いと思った。そして、山伏山の皆さんがボランティアであるのに祇園祭の手伝いを協力的に行っていること、そして今回の聞き取りに快く引き受けてくださったことに感銘を受けた。

7 函谷鉾

7.1 概要

函谷鉾（かんこぼこ・写真 27）は比較的規模の大きい鉾である。大きい道路の四条通沿いにあるため、観光客や通行人が多く、活気がある印象を受けた。「くじ取らず」に指定されていて、長刀鉾に続いて二番目に巡行することが決まっている。通常鉾上に上がるには女人禁制としているが、函谷鉾は女性も上がることができる。誰でも自由に鉾上を見学することができる。歴史の長い鉾である。

1778 年の天保の大火で鉾が全焼するがしかし、50 年後の 1839 年天保 10 年に函谷鉾町在住の先人たちによって復元される。



（写真 27 函谷鉾）

「函谷（かんこ）」は故事の『鶏鳴狗盗（けいめいくとう）』という史記に出てくる「函谷関」に由来している。「鶏鳴狗盗」とは、孟嘗君が函谷関を越え逃れるため、家来に鶏の鳴き真似をさせたところ欺くことに成功し函谷関を突破し逃げられたというお話で、どんな技能でも役に立つというものの例えとなっている¹⁵。

この故事に由来し、真木（しんぎ）にはこの「鶏鳴狗盗」が全体で表現されている。真木先端にある鉾頭（ほこがしら）には山型と三日月が、真木中ほどにある部分の天王座（てんのうざ）には孟嘗君と雌雄の鶏があり、これらは山中の闇と函谷関を表現している。

この故事に由来し、真木（しんぎ）にはこ

7.2 保存継承

保存主体は公益財団法人函谷鉾保存会になっている。昭和 42 年（1967）に財団法人函谷鉾保存会設立以来運営され続けてきた歴史ある組織である¹⁶。後で詳しく説明するが、函谷鉾は町会を持たないレアケースであるため、この財団法人中心に運営されてきた。そしてこの公益財団法人では『函谷鉾ビル』と呼ばれる建物を所有していて、鉾の部品はすべてこの建物に保管している。ビル一階・二階に保存倉庫を所有していて、種類別に、比較的重い鉾の



（写真 28 函谷鉾保存会提灯）

資材・部品は一階、装飾品は二階とフロアを別にして保存しているそうです。そして祇園祭付近になると『作事方』と呼ばれる作り手が組み立てを行うが、函谷鉾の場合は専業の大工さんが担っている。鉾屋根・櫓（やぐら）・車輪の三つに分業しているようで、『作事三役』と呼ばれている。彼らは、組み立てはもちろん解体も担っている。

7.3 構成員の成り立ち

先に説明した通り、この函谷鉾を運営する主体は、他の多くの山鉾町のように町内会単位ではない。通常は町内会単位で保存会が構成され、山鉾の運営がなされるが、函谷鉾町は町会に世帯数がゼロの珍しいケースである。というのも、函谷鉾町が位置している四条通の周辺は商店街で栄えている地域であり、住宅が全く立っていないためだ。

そのため函谷鉾町は、町会員を持たない山鉾町であり、「公益財団法人函谷鉾保存会」を組織し運営してきた。そしてこの人員構成だが、他の山鉾町でも行われているような企業協賛をいただいている、企業の方々や元々函谷鉾町にゆかりのある人が主体となって構成されている。その他、町会員を持たない函谷鉾は構成員が持つ個人的なネットワークの中からも構成員になる方を確保しているようで、これが現在函谷鉾存続のための大きな一つのキーになっているように感じた。というのも調査中に多くの若い人材を目にしたからである。

函谷鉾には 2013 年から現在まで 10 年ほど、京都産業大学 文化学部小林ゼミの学生がボランティアとして参加しているようだ。京都産業大学の 1～3 年生の学生が、毎年函谷鉾に関わる準備から祇園祭当日の運営まで保存会の皆様と協力するという。これは、保存会継承委員の方が若手確保の手段について考えていたところ、大学の演習科目／インターンシップという形で若い学生を誘致しようというアイデアが出され、実現されたものだそうだ。ボランティアに参加した学生は、実践的に祇園祭・函谷鉾について学ぶため、地域の伝統継承について理解が深まっている様子だ。そのため、大学卒業後も自身の意思で函谷鉾の運営スタッフとしてボランティアに来てくれる方もいるようで、今ではその数 1,000 人にのぼることだ。これに関して保存会の皆様も、今では欠かせない存在となっているようだ。今では函谷鉾保存会と関わりたいが故に京都産業大学を志す学生がいるほどだそうだ。

7.4 資金調達

ここにも世帯数がゼロであることが少し影響してくる。通常であれば町会費を集金して、運営資金の足しにする山鉾町がほとんどだが、函谷鉾は世帯が無いいためそれが不可能になっている。そのため資金の内訳は、文化庁が交付している文化財保存事業向けの補助金、ちまき等物販の売り上げサポーターズクラブ「あすの函谷鉾をつくる会」、そのほか企業の協賛をいただきながら運営しているとのことだ。

7.5 囃子方

函谷鉾の囃子方には嘉多丸会（かたまるかい）という名称がついており、祇園祭全体でみると珍しいケースだという。練習期間に関しては、基本的には年間を通して定期的に練習を行っているそうだが、いよいよ祇園祭が近づいてきた 5～7 月には練習が集中的になるとのことだ。

後継者育成については、おおそ小学 2 年生ごろから練習に参加し始め、参加以降は 80 歳くらいまで一生関わり続ける人が多いとのこと。ここで、小学生など学校に通っているまだ

小さい子どもたちも参加するわけだが、祇園祭は1か月を通して行う長いお祭りのため平日に行くこともある。そういった際学校側は、子どもたちに対して公欠にするという対応を取ってくれるそうだ。

こういった対応は、地域や自治体が伝統や祇園祭に参加する意味の重要性を理解している証拠だと感じた。また、嘉多丸会というブランディングもあってのことか、囃子方として参加することは小さい子供のあこがれの的になっているそうだ。函谷鉾の囃子方は、囃子方に名前があってそれに憧れる子供が多いことや練習期間など、少しねぶたと雰囲気似ているように感じた。

7.6 伝統継承

函谷鉾保存会では、歴史ある函谷鉾を確実に後の世代に伝えるべく「伝承委員会」が結成され、伝統継承に向け活動している。その中の一つの活動として、大きく伝統継承に寄与していると考えられるのが、この伝承委員会の勉強会である。先輩の委員から、まだ伝承委員になって間もなく経験の浅いメンバーへ向けて、祇園祭とは、函谷鉾とはなんたるかを教授するというもので、その内容は、神事であることの心構えや、先人が守り抜いてきた思い・伝統など、形式的なことから精神的なことまで多岐にわたる。そしてこの勉強会のみならず、函谷鉾の運営で実践を交え・繰り返すことで、次世代の担い手へ思いや知識といったまさに「伝統」を確実に繋いでいる¹⁷。

また函谷鉾では伝統継承のため、多くの SNS を駆使して祇園祭・函谷鉾に関する多くの情報をアーカイブしている。Instagram や Facebook、X、独自の EC サイトなど、扱っている種類が多く、その内容は部品・化粧品の説明や管理方法、由来・歴史、神事や準備の様子などほぼすべての工程が掲載されている。特にコロナ禍が明けて例年通りの開催に復活した一年目の投稿には、協賛企業の月桂冠の厚意により、伝統ある「提灯落とし」と呼ばれる行事の存続が可能になったストーリーが記載してあるなど、イレギュラーに対してどう乗り越えたのか、当時の様子がしっかり残されていた。多くの伝え残すべき情報を、現代の技術を活用し、より多くの年齢層に発信している。そのため、少なからずこうした活動が、伝統継承に寄与していると感じたことに加え、若い世代へ届きやすいツールであるため、若者に伝えるという継承の本質をついた素晴らしい取り組みだと感じた。

これらのことから、閉鎖的な環境で伝統を継承していくためには、人員確保のやり方をシステム化することで、若者世代、すなわち後継者を取り込んでいくことが可能だと感じた。祇園祭に限らず、全国各地の伝統文化や伝統行事の存続が危ぶまれているが、先にも説明されたソーシャル・キャピタルが、地方ならではの人的ネットワークを積極的につなげ、それが深まることで、伝統継承につながると感じた。

伝統というと、他を受け入れず排他的な印象を受けがちだが、函谷鉾のようにボーダーレスに協力してくれる人を受け入れていくことが大事だと感じた。そして積極的に若い世代に発信していくことで伝統の重みを理解してもらえるように感じた。

8 結論

8.1 山鉾屋台の比較分析

聞き取りを行ってきた山鉾屋台を、冒頭の理論枠組みに照らすと、図 2 のようになるだろう。以下それぞれ説明していく。

①**長刀鉾**：ソーシャル・キャピタル的視点から見ると過去に参加したという同じ背景を持つことから、**結束型**といえる。資材方代表など長年携わるうちに重役が任せられるようになることは、上下関係のようなヒエラルキーの発生を示唆することから、**垂直型**といえる。長刀鉾町というグループのメンバー間のネットワークが築かれていることから、**閉じたネットワーク**といえる。

②**船鉾**：マネジメント以外は外部委託ということから背景が異なる人たちが集まっているため**橋渡し型**に分類されると考えられる。船鉾は外部への委託が多いため第三者との第三者のつながりが強いことから**開かれたネットワーク**と考えられる。

③**蟬螂山**：保存会の役員が同じ背景を持つマンションの住民で構成されていることから、**結束型**に分類されると考えられる。役人の構成要員がマンション住民であり、岡部さんが常任理事を務められているように保存会内で役職はあるものの、師匠と弟子というようなヒエラルキーはなく同等な関係であることから、**水平型**に分類されると考えられる。蟬螂山は住民内でのコミュニティはもちろんの事、マンションに移り住んでくる人や観光客、ファンなど外部の第三者と結びつきも強いことから**開かれたネットワーク**に分類されると考えられる。

④**山伏山**：同じ町内の住人や会社の社員等から構成されているため、**結束型**であると考えられる。上下関係や師弟関係などはなく、町内のメンバーで役割分担しており、ヒエラルキーもないため、**水平型**であると考えられる。同志社大学のラグビー部の部員が曳き手として参加しているなど、「開かれたネットワーク」の要素があるが、SNS 等を運用していなかったり、外部とのつながりがうすかったりする点から、**閉じたネットワーク**という要素もあると考えられる。

⑤**函谷鉾**：函谷鉾保存会を構成する主なメンバーが函谷鉾町にもともとゆかりのある人物であること、そうでなくとも函谷鉾に長く関わっている人物が多いことから、函谷鉾は**結束型**に分類されると考えられる。公益財団法人・継承委員会・サポーターズクラブ・京都産業大学の学生ボランティアなど、それぞれの分野を分業し合いながら運営しており、フラットな組織なのでヒエラルキーは無く**水平型**に分類されますが、囃子方の嘉多丸会や継承委員会に注目すると、技術的な指導や勉強会など垂直的な関係がみられるため、部分的に『垂直』とも言える。函谷鉾のコミュニティは、構成員の個人的なネットワークや京都産業大学の学生との関係性を築き、その規模を年々大きく強力なものにしているため、コミュニティは開放的であり**開かれたネットワーク**である。

	背景の共有		ヒエラルキーの有無		第三者との関係	
	結束 (背景 同 じ)	橋渡し (背景 別)	垂直	水平	閉じた	開かれた
長刀鉾	○		○		○	
船鉾		○	?	?		○
蟠螂山	○			○		○
山伏山	○			○	△	△
函谷鉾	○		部分的に	○		○

(図2 山鉾屋台分析)

8.2 「青森ねぶた祭」との比較

最後に、総評とともに祇園祭とねぶた祭りを比べてみようと思う。京都の祇園祭は全体的に見れば「結束型」、「水平型」、「開かれたネットワーク」という傾向にある。一方、青森ねぶたは囃子方を見ればわかる通り同じ企業内で、囃子団体を組むこともあれば背景も異なる市民同士が囃子団体を組むこともあるため、全体的にみると橋渡し型の面が強い傾向である。

しかし団体ごとに見れば結束型の傾向が強いところも少なくない。また制作者でいうなれば、全体を指揮するねぶた師、それを支えるねぶたスタッフ、弟子、囃子団体で言えば、囃子会会長、副会長など長年携わるにつれて重役が任されていくところから「垂直型」の特徴がみられる。

ネットワークの特徴を述べるならば、ねぶた制作には必ず欠かせないスポンサーの存在が大きいことから開かれたネットワークの特徴があると言えるだろう。祇園祭の鉾調査全体を通して、地域ごとに組織図や関係性が異なっており、その特徴にあった運営をしていることが分かった。ここで得た知識を活用し、ねぶたなどの地域の伝統文化にあてはめて分析することで、地域問題の発見・解決や糸口につながっていくのではないかと考えた。

おわりに

それでは、冒頭で述べた問題設定にそって全体をまとめていきたいと思う。本調査の研究目的は、京都祇園祭の伝統文化がどのように継承・アーカイブ化されているかについて調査、思考することにあつた。私たちは、先行研究で山田浩二氏が執筆した「都市祭礼文化の継承と変容を考える」を読み、伝統継承には「ソーシャル・キャピタル」的思考が密接に関わっ

ていることを理解した。そこで、京都祇園祭では、保存主体、資金調達、保存場所などに注目し、調査を行った。

第三節からの本文でも紹介されるが、京都祇園祭で巡行される「山」「鉾」は各町内によって保存方法、存続、運営にかかわる資金集め、主体となっているコミュニティはそれぞれ異なっている。青森ねぶた祭は、多くの地域住人や地域企業の協力があり、成り立っている。しかし、京都祇園祭は市内に住人が住んでいない町内も存在しているため、伝統文化の継承としては少し異例な保存、継承方法がみられた。また、現代技術(CG など)を生かしたアーカイブ化も積極的に取り込まれており、山車の詳細が事細かく一般市民に共有されている祭、伝統文化の珍しい例といっても過言ではないだろう。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、祭自体は中止に追い込まれたが、鉾を管理している各町内は SNS を活用することで既存の伝統継承、アーカイブの在り方を変えていったと言える。

第八節では京都祇園祭と青森ねぶた祭を「ソーシャル・キャピタル」的視点から比較し分析した。京都祇園祭は結束型、水平型、開かれたネットワークの傾向が見られ、青森ねぶた祭は垂直型、開かれたネットワークの傾向が見られた。しかし、結束型、橋渡し型のどちらかに分類するのは団体によって異なっているという理由からもう少し調査が必要であると判断した。ここから述べられることは、少子高齢化の影響を受け、後継者の減少が課題となっている伝統文化には第三者、組織の関わりが必要不可欠であるということであり、第三者らを外部から内部に取り込むことができるようなシステムが必要なのではないかと考える。

青森では、「大型ねぶた」のほかに「地域ねぶた」と呼ばれる町内単位で運行されている。少子高齢化、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、現在の「地域ねぶた」運行は減少している。今回の京都祇園祭の調査で発見した保存継承やアーカイブ方法を「地域ねぶた」に落とし込むことはできないだろうか。双方とも、祭りに携わるコミュニティや資金の出处も異なるため、それぞれの伝統継承のメリットを生かすことのできる新システムを考えることによって次世代の伝統継承の在り方が確立していくと考えている。そのために、今後も各地の伝統文化に触れ合い比較することで、青森ねぶた祭の継承について考えていきたい。

註

- 1 長江家パンフレットより参照
- 2 「祇園祭」より参照 (www.gionmatsuri.or.jp.)
- 3 船鉾の駒札説明版より参照
- 4 長刀保存会岡本さんから頂いた長刀鉾に関する資料より参照
- 5 船鉾の駒札説明版より参照
- 6 芦刈山、木賊山、油天神山、郭巨山、放下鉾、太子山、四条傘鉾の駒札説明板より参照
- 7 会話で使えることわざ辞典：imadas より参照
- 8 祇園祭山鉾連合会 HP より参照
- 9 刀剣ワールド 禁門の変より参照

- 10 蟪蛄山保存会 Instagram より参照
- 11 竹田工務店公式サイトより参照
- 12 西村花店「それでも山鉾をわたすわけ」より参照
- 13 鶏鉾、占出山、孟宗山、霰天神山の駒札説明板より
- 14 山伏山の駒札説明板より
- 15 公益財団法人函谷鉾保存会より参照 (<https://www.kankoboko.jp>)
- 16 同註 15
- 17 函谷鉾保存会 instagram (<https://www.instagram.com/kankoboko/>)

参考文献／参考 URL

長刀鉾 (<https://naginatahoko.jp/>)

祇園祭 (www.gionmatsuri.or.jp)

長刀鉾保存会 岡本さんから頂いた長刀鉾に関する資料

山田浩之 2016『都市祭礼文化の継承と変容を考える』

京都ガイド (<https://kyototravel.info/houshouyama#3>)

山伏山（京都祇園祭の山）(kyoto-k.sakura.ne.jp)

浄蔵貴所 京都通百科事典 (kyototuu.jp)

占出山 – Wikipedia

株式会社 竹田工務店 (<https://takeda-kyoto.co.jp/company/>)

太子山保存会で配っていた資料

函谷鉾／4 travel (<https://4travel.jp/travelogue/10482265>)

函谷鉾／函谷鉾保存会 Instagram (<https://www.instagram.com/kankoboko/>)

公益財団法人 山鉾連合会 HP (<http://www.gionmatsuri.or.jp/yamahoko/toroyama.html>)

蟪蛄山保存会 公式サイト (<https://tourouyama.jp/>)

蟪蛄山保存會 公式 (Instagram <https://www.instagram.com/tourouyama/to>)

「蟪蛄の斧」意味 (<https://imidas.jp/proverb/detail/X-02-C-20-1-0021.html>)

3 山田浩之編『都市祭礼文化の継承と変容を考える』レジュメ集 (ミネルヴァ書房、2016 年)

序章 都市・祭礼・文化

担当：阿部仁菜

1 日本の年中行事と祭り

<祭の特徴>

- ①私の祭り——祖先祭祀、地鎮祭、厄除けの祈禱などのための祭り。
- ②職能神の祭り——豊作・大魚祈願、商売繁盛、庖丁の神さまなどの祭り。
- ③地域の祭礼——産土神（うぶすながみ）の祭り、村社・郷社など地域社会祭祀、都市の大規模な祭礼など。
- ④公の祭り——天皇家の神事、国の祝祭的行事、戦没者慰霊祭、原爆被災者法要など。

<地域の祭礼>

- ①伝統継承型——祇園祭、高山菜など (神事、民俗行事)
- ②行政主導型——神戸まつり、わっしょい百万夏まつりなど
- ③市民主導権型——YOSAKOI ソーラン節

2 都市の祭礼の特色

<都市の祭礼の特色>

- 第1は、「見物人」の存在。「する祭」から「見られる祭」
- 第2は、「競いあい」の存在。「見られる祭」から「見せる祭」
- 第3は、競いあいから生まれる「瞻目性（どうもく）」。
「都市文化との交渉」が深まる
- 第4は、夏の祭が多い。「競いあい」が生じ、「見せる祭」に発展
カミを慰撫するための神賑しの行事 → 人賑しの行事 → 見せる祭

3 新しい社会科学的視点

日本の祭り：2つの方向性

①民俗学：農村（柳田國男）

②社会学：都市

都市社会学、都市人類学

→新しい視点 ソーシャル・キャピタル論、文化経済学

(1) ソーシャル・キャピタル論

ソーシャル・キャピタル＝絆 「社会資本」

強い絆を考える：ソーシャル・キャピタル論
緩い絆を考える：新ソーシャル・キャピタル論
近年の祭り：両方の視点が必要→（第2章であつかう）

（2）文化経済学的視点

文化経済学：文化的特性を考えて、経済学的視点で分析する

本書で扱う文化的特性

①生活文化、②文化遺産、③観光サービス

第1章 都市祭礼と文化経済学

担当：鳥山凌空

1 文化への経済学的アプローチ

（1）文化の概念

文化とは

- 1.文化人類学や社会学の枠組みで用いられる広義の概念
- 2.文化経済学の対象とする狭義の概念

文化的価値

文化活動によって生み出される新しい価値

文化的財

文化的価値を持つ財・サービス

（2）文化的財と文化的価値

経済学：「経済的価値」

文化的財→文化的価値の構成要素

◎スロスビー

美的価値、歴史的価値、精神的価値、社会的価値、真正的価値、象徴的価値

◎筆者 文脈的価値、学術的価値、愛着価値、教育的価値

1つの文化的財が複数の文化的価値を持つ場合もある

（3）文化的価値と経済的価値との関係

- 1) 文化的価値そのものが経済的価値をもたらす
 - 1a) その経済的価値で費用を回収することができる
 - 1b) 費用を回収するだけの経済的価値が得られない
- 2) 文化的価値がその財に付加価値を与え経済的価値を高める

- 3) 文化的価値はあるが経済的価値が生じない
- 3a) 個人が美的価値などの文化的価値を自己生産・自己消費するケース
 - 3b) 学術の成果である学術文化的財のケース
 - 3c) 歴史的価値、真正的価値をもつ昔の道具、旧式機械や古文書などのケース
 - 3d) 歴史的価値が高いが、博物館に入らない「文化遺産」と呼ばれるもののケース
 - 3e) ある集団あるいはコミュニティによって集合的に生産・消費されるケース

2 祭礼の社会経済モデル

すべての財・サービスは「資本」と「労働」とが投入され結合されて産出される。その際、技術や知識が利用されプロセスが効率的に実行される。祭礼は無形財という性質をもつアウトプットである。各地の祭礼は独自の歴史をもち、歴史的価値をもっている。よって祭礼は種々の文化的価値をもつ文化的財ということが言える。

この文化的財の産出のために投入される「資本」が山車類など経済学的には「祭礼資本」。この山車類を曳行する行為（囃子、統率）は経済学的に「祭礼労働」と呼ぶことができる。祭礼資本と祭礼労働を結合して祭礼という無形財の産出を実行するのが祭礼組織である。

祭礼組織 祭礼資本+祭礼労働 ⇒ 祭礼(無形財)

スロスビー 「文化資本」の概念「文化的価値を具体化し、蓄積、供給する資産」

二つの形態で存在

- ①「有形」例 建物、芸術作品 ②「無形」例 慣習、信念、価値

祭礼に適用 ①「山車類」は有形の文化資本

②祭礼に必要な知識などと祭礼組織は無形の文化資本

祭礼組織＝ソーシャル・キャピタルとして機能

祭礼資本 祭礼労働 1 町内の住民自らが祭礼労働を提供（町内のボランティア）

2 町外の参加者が無償、有償で祭礼労働の提供

見物人、観光客の増加で観光業界に好影響

祭り関連産業に好影響 / 地域ブランドとしても機能

これらの経済効果が伝統工芸・芸術の保存・継承・創造に重要な貢献をする。

祭りが地域のアイデンティティや絆、ソーシャル・キャピタルの形成、強化に大きな役

割を果たす

第2章 都市祭礼とソーシャル・キャピタル

担当：伊藤源大／吉田翔太

1 ソーシャル・キャピタルは何か

ソーシャル・キャピタル→社会関係資本=人と人との間の絆

定義

ロバート・パットナム

：協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼、規範、ネットワークなどの社会的仕組みの特徴

ネットワーク→人や組織の間に醸成される信頼と規範

(1) ソーシャル・キャピタルの外部性

→協調的行動が市場を通さない外部性として生まれる

稲葉陽二(筆者)：

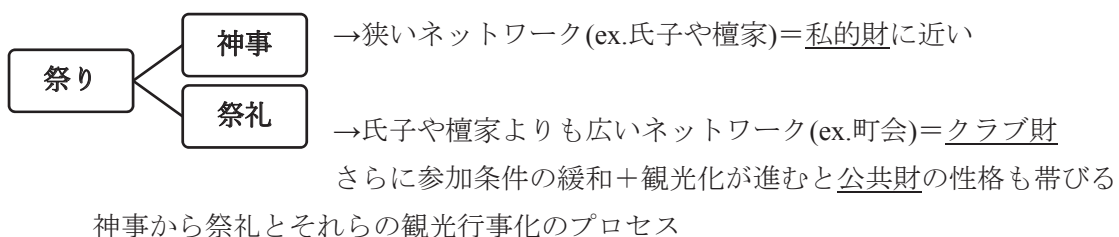
ソーシャル・キャピタルを「心の外部性を伴う信頼・規範・ネットワーク」と定義

「心の」→人々に認識されて初めて意味を持つ外部性

(2) 信頼・規範・ネットワークの関係と3つのソーシャル・キャピタル

- ・公共財：一般的信頼(社会的信頼)へネットワークとは無関係に形成され、個人に属さず、社会全般が保有しているもの (ex.国防サービス)
- ・私的財：基本的に個人に属しているもの (ex.コネ)
- ・クラブ財：特定の個人間・グループ内でのネットワークに基づく特定化の信頼・規範 (ex.有線放送)

(3) 祭りの変化とソーシャル・キャピタル



ソーシャル・キャピタルの私的財、クラブ財、公共財の三つの側面を持っている

(4) ソーシャル・キャピタルの三類型

結束型と橋渡し型

結束型：同じ背景を持つ者同士(ex.学校の同窓会)

橋渡し型：背景が異なる者同士(ex.NPO 法人)

水平的と垂直的

水平的→メンバー間が同等であるもの(ex.プロテスタント宗派のネットワーク)

垂直的→上下関係のようなヒエラルキーがあるもの(ex.カトリックのネットワーク)

閉じたネットワークと開かれたネットワーク

閉じたネットワーク→グループのメンバー間のネットワーク

開かれたネットワーク→外部の第三者と結びつくネットワーク

(5) ソーシャル・キャピタルのダークサイド

ソーシャル・キャピタルが悪用されることで及ぼされる影響

→グループ内の絆が強すぎてグループ外の人々や組織を排斥する

2 宗教とソーシャル・キャピタル

(1) ソーシャル・キャピタルからみた宗教と祭り

宗教的ソーシャル・キャピタルの4類型(P29 図2-3 参照)

低・橋渡し/低・結束型→閉鎖的、個人主義的

低・橋渡し/高・結束型→閉鎖的、共同体主義的

高・橋渡し/高・結束型→開放的、個人主義的

高・橋渡し/低・結束型→開放的、共同体主義的

(2) 村の祭礼と都市祭礼の違い

村の祭礼は村内の結束力を高める

個人(低・橋渡し型/低・結束型)→低・橋渡し型/高・結束型に移行する

これに加えて都市祭礼は祭礼としての色彩を強め、コミュニティ外との交流を持つ

低・橋渡し型→高・橋渡し/高・結束型に変化する

ソーシャル・キャピタルの研究で無尽の重要性が指摘される

無尽の優れた仕組み ①「自発的なつながり」 ②「程よい閉鎖性」 ③「定時制」

都市祭礼は

- ・村の神事・祭礼と比べれば「自発的つながり」の側面が強い
- ・それなりに知り合いもあり、「ほどよい閉鎖性」が仲間意識を育んでいる
- ・「定時制」は、人間関係が希薄になりがちな都市において文化や規範に重要

3 祭りの効用

(1) 社会的距離を縮める

・ 祭りは人々を近づける

- ・社会学：ソーシャル・ディスタンス 日本語：社会的距離
奏氏 祭りには人と人との間の社会的距離を縮める力がある
→祭りへの参加は「隣人として同じ町に迎え入れる」ことである

(2) 旧住民と新住民との間の溝を埋める

- ・鯉山保存会の例：「祭り」が両者の溝を9年で埋めた
- ・現代の複雑な家庭事情や核家族化を踏まえて、祭りは住民同士の間関係を構築する
共通の話題の提供、共通作業の機会と共通の目的の提供、会話の機会の増加、共通の価値観の形成

(3) 文化と価値観の世代間継承—岸和田だんじり祭の魅力

ジェネラティヴィティ（世代間継承感）

次世代の価値を生み出す行為に積極的に関わること

「祭り」は文化と価値観の世代継承の仕組みでもある

1) だんじりの魅力

概要：岸和田だんじり祭では各町会(自治体)運営主体となる、それぞれ役が与えられた小学生から大人までの年齢別によって大組織が構成される。祭りを取り仕切る若頭などはそれなりの実行力、リーダーシップ、人格者でないと務まらない。住民総出の祭りである。

特徴

- ・通常の神社の祭礼よりも地車1台について動く参加者が格段に多い
- ・祭り自体が町内会単位で基本的に住民の寄付と献身的なボランティアで成立
→住民のソーシャル・キャピタルそのものの力が表現されている祭り

2) ソーシャル・キャピタルの世代間継承感醸成の仕組みとしての祭り

- ①結束型ソーシャル・キャピタル：社会での肩書を越えて一体になれる
- ②橋渡し型ソーシャル・キャピタル：町と町との間でみられる
- ③リンキングなソーシャル・キャピタル：行政やその他の組織と結びつく

- ・ 具体的な過程

祭りの空間を共有していく中でしきたりやルール、倫理的規範や文化的価値を身に着ける。他の世代や属性の人々と協力する中で、地域の人々と新たな関係性や親密性が生まれる。祭り終了後、新たな知人や顔見知りが出来ており新たなつながりやコミュニケーション、情報源が生まれる。

→祭りは結束型、橋渡し型、リンキングなソーシャル・キャピタルの醸成装置であり、文化・価値観の世代間継承の仕組みでもある

4 祭りにみる文化資本とソーシャル・キャピタルの相互醸成

祭りそのものもソーシャル・キャピタルの存在に大きく依存している

だんじり祭り→祭礼組織は「無形の文化資本」である

→ソーシャル・キャピタルは文化そのものであり、無形文化資本を形成し、育む

- ・ 岐阜県の地方自治体の例 紅谷正勝氏

ソーシャル・キャピタルと文化資本との相互作用・相互補完が認められると指摘

↓

NPO 発生率が高い自治体は社会関係資本を醸成させる文化としての装置を持ち、文化を継承する上で、相互作用・相互補完が認められる。

- ・ 祭りは人々を「ケ」（日常）から解放する「ハレ」（非日常）の場である。

非日常の祭りが日常に反映され社会的距離が縮まり、絆が深まる

関係が壊れそうになるころに翌年の祭りの準備が始まるため関係が長期にわたり持続

★祭りは常に「過去」と「未来」の「中」にあり、壊れれば過去に培われ、未来に継承されるべき文化が失われるという意味で、祭りのソーシャル・キャピタルはかけがえのないものである。

第3章 新しい共同性を構築する場としての祭り — 祇園祭にみる祭緑の実態 —

担当：内海空／中野ありす／松田優唯

1 京都祇園祭の魅力と歩み (p.46)

(1) 祇園祭の魅力

期間：7月1日 『吉風入り』（祭事始め）

7月31日 『疫神社夏越祭』

一か月間様々な行事が行われるが...

○最重要行事

①『神輿渡御』

②『山鉾巡行』...山鉾建て・曳き初め・宵山・巡行の総称。

大路を 33 基の山鉾が巡行。

重要無形文化財・無形文化遺産に選定登録。

行事参加者	見物客
約 5,000 人	約 180 万人

宵山情緒 (提灯・出店・お囃子・屏風祭など)

風流 (華麗な懸装品)

17 日の巡行 (祭りのハイライト・辻回し・くじ改め)

(2) 祇園祭の歩み

最も古い起源を持つ祭りの 1 つ(以下大まかな変遷) 794 年～(1200 年近く)

○『御霊会』: 水の汚染による疫病(怨みを残した怨霊・疫神のしわざ)を鎮める。

▽『祇園御霊会』: 疫病徐災神・牛頭天皇の社壇が開設。毎年開催の形式。

「蘇民将来」 神泉苑

▽今日の原型「作り山」を町毎に結束した共同体を形成。結束の象徴。

○町毎に風流が継承され、現行の山鉾巡行が完成。華麗・盛大に。

2 祇園祭の構成

(1) 祇園祭の行事

1 か月間に行われる行事区分

①**神輿渡御**—神輿洗式・宵宮・神幸祭・還幸祭・神事済奉告祭など

八坂神社・氏子集団・清々講社(祭の支援組織)により催される。

②**山鉾巡行**—くじ取式・山鉾建て・曳き初め・宵山・山鉾巡行など

祇園祭のハイライト。観光客を多く集める。

③**奉納行事**—伝統芸能奉納・献茶際・石見神楽・琵琶奉納・花傘巡行・狂言奉納

大部分が八坂神社境内で行われる新振・芸能(文化)

(2) 華やかな山鉾——文化資本

山鉾は 2 つの構造に分類される。

①「二層吹抜屋形」 ②「単層露天昇山」

最重要の役割—「長刀鉾」...最も早く誕生。

くじ取らずで毎年先頭を巡行。
唯一の生き稚子が乗る。

山鉾それぞれの風流による飾りつけ・名前の由来の詳細は資料
山鉾には風流の他装飾芸能の美が加わり、華やかさを競う＝「動く美術館」

(3) 山鉾巡行の運営組織

33 の山鉾は、それぞれ 33 の山鉾町に所属し各町から巡行に出る。

巡行に関わる人々は 4 つのグループに分けられ、協力して巡行がなされる。

- | | |
|---------------------------|----------|
| ①山鉾保存会—運営責任者 | →運行団体協議会 |
| ②囃子方——コンチキチンの祇園囃子 | →囃子方 |
| ③作事方——専門技術者集団 | →ねぶた師 |
| ④曳手——綱を曳く。アルバイト・ボラ。ちまき作り。 | →曳手 |

原則①と②(笛以外)は町内から、③と④は町外からの参加。

今日は職住分離・企業立地の増加

→①で町に住まない「通い町衆」が増える。

現在の祭り組織は希薄化し、『祭縁ネットワーク』と呼ぶ新しい関係性(共同性)

+

統括組織『祇園祭山鉾連合会』の 2 つで運営

(4) ボランティアの登場

経済成長進行→人手不足が顕著に。

従来は農家が担っていたが農業の縮小

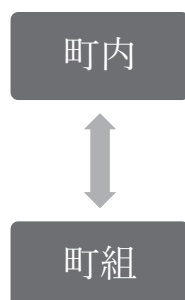
→山鉾に車輪を付ける形がメジャーに。

学生アルバイトを募集するシステム導入

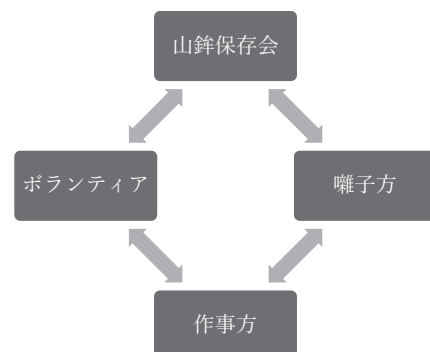
★「京都祇園祭ボランティア 21」→「青森ねぶた祭ボランティア団体」？

(5) 山鉾巡行とソーシャルキャピタル

従来



現在



山鉾保存会——結束力の強いソーシャルキャピタル
囃子方——居住者と町外の縁故者から構成、後継者増加
緩い閉鎖型のソーシャルキャピタル
作事方——別の工務店

この3団体が固定的に結合して補完的な関係。結束型のソーシャルキャピタル。

曳き手を供給する団体もほぼ固定的で、
ソーシャルキャピタルを橋渡しする橋渡し型ソーシャルキャピタルである。

以上4つの集団は伝統を守ろうとする意識が高く、集団間の信頼関係も厚いためソーシャルキャピタルとして機能している。

3 祇園祭・山鉾巡行を支えているもの

(1) 第2次世界大戦前の運営組織

明治以前に山鉾巡行を支えてきたもの

-) 町衆の財力と風流の心
-) 町衆による山鉾巡行が可能になった背景に、町共同体が形成されたことがある
-) 寄町（よりちょう）制度

→ 特定の山鉾町に対して「一定の米や銭を納めて経費の分担を負い、祭礼に参加したり、その他の諸役を努める氏子の町」のこと

◎ 山鉾巡行は山鉾を出す町だけでなく、近辺の町の支援を受けて実施されていた。

- ・ 明治維新以降、寄町制度は廃止されたため山鉾町に大きなダメージ。
- ・ 新しく山鉾巡行・神輿渡御（みこしとぎょ）の経費を補助する組織として「清々講社」が設立され、危機は回避された but 氏子町全体を一つの寄町ととらえるので、寄町制度の再編といえる。
- ・ その後の大正時代・昭和時代には、山鉾町の合議によって、「山鉾連合会」が組織され、京都市では修繕補助制度が整い、補助金を支出する制度が新設された。

まとめ：各山鉾町の自助努力と京都市や清々講社の保護・支援によって、山鉾巡行は江戸時代に劣らぬ隆盛を取り戻していった。

(2) 第2次世界大戦後の転換

- ・ 戦時中4年間巡行中止、その後徐々に復活していったが、山鉾町は戦後の近代化・都市化の波の中で、深刻な影響を蒙ることになる。

- ・繊維産業関連の町衆の没落がはじまり、職住一体型の伝統的な町家は壊されて近代的なビルに変わっていった。山鉾町は変化を余儀なくされた。

町会所→保存会→財団法人

Before：相続問題や町経費による維持管理などが困難

After：旧住民、新住民、町の企業が祭りに参加＝新しい町衆が形成

まとめ：現在、すべての山鉾町で山鉾保存会が設立され、その大部分が公益財団法人となった。

(3) 政府の支援

- ・明治4年から昭和40年にかけて文化財保護に関する法律は文化財保護法にまとめられ、鶏鉾の飾毛綴1枚、鯉山の飾毛綴3枚、函谷鉾の飾毛綴1枚、芦刈山の小袖、浄妙山の鎧が重要文化財に指定された。
- ・京都市は山鉾巡行を観光行事と位置づけて観光振興の立場から、補助金制度を整えたり、通りの拡幅などの都市整備を行ったりしていった。
- ・京都市観光連盟の主催で御池通南側に有料観覧席が設置され、観覧料が山鉾巡行補助金に回るというシステムが構築された。

まとめ：政府の支援は、国主導の文化財保護／地方政府（京都市・京都府）による観光行政の2つの面から行われてきた。

(4) 山鉾行事の資金調達

- ・山鉾保存会が財団法人である場合、山鉾行事運営の資金源は次の4つである。
 - 補助金：巡行、修繕、染織物新調
 - 不動産収入：町会所、ビル賃貸料
 - 授与品などの販売収益：厄除けのちまきや護符、土産物からの純収益
 - 寄付金：協賛金、寄付
- ✧山鉾の立地によって収入の影響が大きい、資金源への依存状況の差が大きい

まとめ：各保存会は、補助金をベースとして、立地条件を活かしながら、自助努力を行い、持続可能性を確保している。

4 祭りと山鉾町

(1) 函谷鉾町

- ・函谷鉾町

京都都心の四条通東入るという所に位置する

第二次世界大戦後にビル化が進み、居住者が減少

・函谷鉾：

「洛中洛外図屏風」に装飾の函谷鉾が画かれている

1788 年の天明の大火によって鉾の大部分を消失 → 50 年後の 1839 年に復興
戦後のビル化と人口の郊外化によって人口が減少

→財団法人函谷鉾保存会設立（鉾と町会所などを基本財団とする）

→町外へ移動した先住民を「通い町衆」としてつなぎ止めることが可能になった

・保存会の取り組み

①「函谷鉾ビル」の建設→安定した賃貸収入を生む

②囃子会「嘉多丸会」の発足

→函谷鉾囃子の向上と研究・保存継承、会員の親睦が目的

1982 年：「あすの函谷鉾をつくる会」設立→文化遺産を守り継承するため

★小松秀雄：函谷鉾町に「祭縁ネットワーク」が機能していると指摘

通常「実践コミュニティ」→金融関係の企業を中心とする「疑似的コミュニティ」が

存在：「保存会・囃子方・作事方・曳き手のすべてが町外からの参加」

→逆に結束の強いソーシャル・キャピタルが形成

(2) 百足屋町

百足屋町：四条烏丸（都心）から徒歩約 5 分の新町通錦小路上という所に位置する

北観音山と南観音山に分かれ、隔年交替で山を出す

・1966 年：居住者減少に対応するため、財団法人南観音山保存会設立

・町内役員が多数を占めているため、地縁を基礎にした祭縁ネットワークが形成

・1980 年代から地価が高騰し、バブル経済となる

→山鉾町に多くのマンションが建った

・「山鉾町の街並と担い手を守る会」結成、

「山鉾町を守る・百足屋町まちづくり宣言」発表

宣言を一部抜粋

◦ワンルームマンションの建設を認めません。

◦山鉾の先端を超えることのない中低層の町並保存に努めます。 など

→百足屋町と六角町はマンションのない町として存続している

(3) 明倫学区

明倫学区：四条烏丸の北西部にある 27 カ町からなり、そのうちの 13 カ町が山鉾町

〈課題〉

・マンションの建設が進む、地域と不協和な建物や看板が多くなり、統一感のない雑

然とした都市景観に変化

- ・マンション住民と従来からのコミュニティとの共生

→京都市の都市計画として「地区計画」が作成

百足屋町：マンション建設を拒否

明倫学区：マンションを受け入れざるを得なかったため、融和を追求

5 祭礼の持続可能性

〈山鉾巡行今後の課題〉

- ①リーダーの高齢化
- ②政府による補助制度の整備
- ③山鉾巡行へのボランティア参加
- ④山鉾町の自助努力
- ⑤祭りを守る人たちの「意地」

「祭り好きの意地」という心情に支えられて山鉾行事は継承されている

第二部 2022 年ねぶた運行団体紹介

青森菱友会

～挑戦を続ける竹浪比呂央 紙の表現に注目！！～

【2023 年の見どころ】

今年の題材は「牛頭天王」。制作は竹浪比呂夫氏である。今回の題材である牛頭天王は弘前市の最勝院護摩堂で祀られ、疫病除けの御利益があると津軽の人々に信仰されている。制作者である竹浪比呂夫氏は、斬新なアイデアと技法を取り入れ、毎年、新たな表現に挑戦する。今年はあえて一体の大きな牛頭天王で迫力を見せる。牛頭天王の肌色の赤の色彩表現にも注目して欲しい。2019 年にねぶた大賞を受賞した「紀朝雄の一首 千方を誅す」で舞っていた紙の表現を取り入れ、蘇民将来の護符をよりリアルな紙質に近づけた表現に挑む。紙と灯りの造形としてのねぶたの可能性を追求する竹浪比呂夫氏は、今年第 7 代ねぶた名人に選出された。ねぶた名人決定後は初となる今年のねぶた「牛頭天王」に乞うご期待！

【歴史】

青森菱友会は平成 2 年に初陣、以降毎年出陣している。平成 2 年からいずれも竹浪比呂央氏が制作を担当している。令和元年は出陣 30 回目の節目の年であった。令和 2 年度、3 年度は青森ねぶた祭がやむなく中止となってしまったため、今年はお出陣 32 回目となる。本団体は平成 30 年に「岩木川 龍王と武田定清」でねぶた大賞を受賞し“平成最後のねぶた大賞”を受賞した団体となった。また、平成 30 年に続き、令和元年にも「紀朝雄の一首 千方を誅す」でねぶた大賞を受賞し、“令和最初のねぶた大賞”を受賞した団体となった。その他「今別の伝説より 大泊の鬼」(平成 12 年)「小川原湖伝説 道忠幻生」(平成 17 年)の過去 4 度ねぶた大賞を受賞している。昨年度(令和 4 年)は「龍王」でねぶた大賞を受賞した。

【運行】

囃子は「青森菱友会囃子方」が行う。以前は 100 名が在籍しており、60～70 名が社員で残りの 40 名程は本団体で演奏したいという一般の方であった。しかし、新型コロナウイルスの影響で以前に比べて人数が減ってしまったため、現在は 50 名ほどで社員が中心となっている。囃子の大きな特徴は音響機材を一切使用しない「生音」へのこだわりだ。笛の旋律と太鼓と手振鉦の迫力をぜひ体感していただきたい。

今年は 3 年ぶりに制限のない通常運行となるため、よりスムーズな運行を目指すという。

【制作】

平成 2 年の初陣から制作者は竹浪比呂央氏である。題材について、菱友会から竹浪比呂央氏に「地域に密着した題材」をお願いしているが、そのほかにスポンサーとしてお願いし

ていることは特にない。平成 6 年～30 年までは青森県各地域の伝説や伝承を題材としたねぶたであったが、30 年目の出陣となる令和元年は青森県の題材から離れた特別な年であった。

今年度は例年通り地域に密着した題材でねぶた制作が行われる。

文責：成田葵葉

青森市民ねぶた実行委員会

【2023 年の見どころ】

今年の大型ねぶたのテーマは「土蜘蛛」であり、北村麻子さんが制作している。源頼光が病気に倒れ、侍の胡蝶が薬を取りに行き、頼光のもとへ届けた。夜に現れた怪しげな僧が土蜘蛛の化け物であり、頼光に糸を吹きかけるが、頼光はそれを刀で切った。翌日、頼光は僧の血痕を辿り、土蜘蛛を退治した。頼光の病気は回復し、彼は「蜘蛛切り」と呼ばれるようになった。この世に起こるあらゆる苦悩と災いを蜘蛛切りのごとく断ち切り、明るい未来が訪れることを願っている。前ねぶたは星野リゾートとロッテも北村麻子さんが制作し、星野リゾートの温泉に入っているねぶたの前は今年作り替える予定である。

青森市民ねぶた実行委員会は企業ではなく、ねぶたが好きな人が集まってできた市民団体である。今年はコロナ禍が明け、記念すべき 20 回目の出陣であり、ねぶた、囃子、運行の三位一体での楽しい運行を目標に掲げている。また、予算はスポンサーの企業で賄っており、今年は「ダイドードリンコ株式会社」、「クラブツーリズム株式会社」、「株式会社近畿日本ツーリスト」、「株式会社星野リゾート」「株式会社ロッテ」「オリックス株式会社」に加え、「麦焼酎いいちこ」が協賛する予定だ。

【歴史】

青森市民ねぶた実行委員会は企業団体ではなく、様々な仕事をしているねぶた好きな人が集まってできた市民団体である。2002 年からねぶたの運行を開始した。そのきっかけは地元の景気が低迷したことだという。それによりねぶたの台数が減り、運行を休止している団体もいくつかあったため、新たに団体を立ち上げてねぶたを出し、祭りを盛り上げていくことになった。

【魅力】

市民ねぶたのねぶたは、北村麻子さんが制作しており、「女性らしいねぶた」にこだわっており華やかで色鮮やかなねぶたが印象的である。市民ねぶたは毎年賞を取っている。花笠や浴衣の貸し出しも行っており、運行が綺麗に見える工夫をしている。北村麻子さんの想いをぶつけた作品、運行、はやしの三位一体の運行を楽しんでほしい。

企業団体ではなくねぶた好きが集まり結成した囃子部「あおもり市民ねぶた囃子隊」とい

う独自の部隊があり、現在の指導役の教えに忠実に従った演奏が主体となっている。隊員数は 150 人くらい。そのうち毎日参加する人は半数くらいだという。週に 3 回ほど、年間を通して練習している。祭り本番に使用する笛用の音響マイク前には演奏が上手い人以外の人も立たせ、全員が技術向上できるように努めているのが特徴である。

文責：西川花菜

日本通運ねぶた実行委員会

【2023 年の見どころ】

今年の大型ねぶたのテーマは林広海氏による「日出処の天子」である。ねぶたは極楽浄土にいらると言われる迦陵頻伽が舞う中、仏教を守護する毘沙門天の御加護を受け、七星剣をかざし、砂邪頭正、恒久平和「和を以て貴しと為す」を希求する聖徳太子の御姿である。また、前ねぶたは日本通運と王林ちゃんの顔が乗ったボートレースの広告が出る。

今年でねぶたを 75 周年連続出陣している日本通運は運行団体の中でも最古参だ。しかし、コロナ禍により、日本通運の中でねぶたを経験した社員が少なくなっており、経験者を増やし、コロナ前のねぶた体制を取り戻す、新たなスタートが期待される。運行ではスピーカー台車を使ってかけ声をする方法に戻すという。また、かけ声をかけるのは男女問わず、希望があればアルバイトでも台車にのせて実施するという。引き手はアルバイトを 50 人程度の学生を集め、昨年ははんてんを着ていたが今年から T シャツを作って運行するという。

【歴史】

日本通運ねぶた実行委員会は、昭和 22 年から連続して祭りに出陣しており、2016 年には 70 周年を迎えた最も古い歴史を持つ団体である。祭りに参加することとなったきっかけの一つは、祭りに参加したいという従業員の声である。その始まりが今まで脈々と続き、70 年以上の歴史を築き上げた。ねぶた祭を広告媒体と捉えるのではなく、地域貢献の一環としてこれまで参加してきた。

【魅力】

みんなで楽しくもとのねぶたのスタイルを取り戻そうとする日本通運だが、今年で 75 回目連続の運行であり、歴史の長い団体で、囃子も伝統的である。元々は、「青森郷土芸能保存会」という名前で活動していた。その後、ねぶた囃子一つに活動を絞り、現在の「青森郷土芸能ねぶた囃子保存会」に改名された。鉦、太鼓、笛の 3 つができて一人前とされ、担当の楽器以外にも演奏することが当たり前とされている。運行中は、昔ながらのファンも含め、見ている人がカッコいいと思えるように魅せる囃子を心がけている。

文責：西川花菜

県庁ねぶた実行委員会

～安全運行で未来を切り開く～

【2023 年の見どころ】

県庁ねぶた実行委員会の今年の題材は「波切不動」。制作者は大白我鴻氏である。混沌とする今の世の中を、平和な未来を切り開いていくことを願うねぶたとなっている。前ねぶたには県行政と関わりのあるものが参加し、送りはメインの「波切不動」に関連しているものになる。また、今年は大白氏が初の一人ねぶたに挑戦するため、ぜひ注目したい。

今年は久しぶりに制限のない運行ができる。県庁ねぶた実行委員会としての最大の目標は「安全に運行すること」。祭りの参加人数が多くなることが予想されるため、手伝いを増やしたり、警備的な対応を強化したりして安全性の確保に努めたい。去年は運行することはできたが、跳人の制限や吹き流し方式の運行であった。新型コロナウイルス感染症の影響で変わったことも維持しつつ、新型コロナウイルス感染症前の運行を取り戻すことを目指している。

【運行について】

運行は、県庁職員と月駿会、アルバイトのスタッフが毎日 100 人程度で行う。ねぶた本体の曳手は 20 人程度必要となるが、今年からアルバイトのスタッフに加えて、県庁職員と月駿会の固定メンバーがそれぞれ 10 人程度ずつ協力して行う。月駿会は、県庁内の自発的な組織であり、扇子持ちを育てる団体である。技術の継承のために、過去にねぶたを担当していた職員、人事課で扇子持ちの経験がある職員が立ち上げた。県庁の囃子は、「県庁ねぶた実行委員会囃子方」という別の団体が行っている。跳人は、自由参加である。子供も参加しやすくなっているため、ぜひ多くの人に参加してほしい。

【制作について】

ねぶたの制作は、我生会に依頼している。現在の制作者は、大白我鴻氏である。ねぶたのテーマはねぶた師に任せており、ねぶた師が作りたいものを作ってもらっている。年末から年明け頃に鉛筆書きの原画を県庁で確認している。3 月末から 4 月頃に色付きの下絵をねぶた師からもらう。

文責：三澤佳奈

東北電力ねぶた愛好会

～地域社会に「寄り、添い」、ねぶたと未来を照らす～

【2023 年の見どころ】

今年の題材は、「東北の雄 阿弭流為と鬼剣舞」。制作者は立田龍宝氏である。阿弭流為が鬼剣舞を従え奮闘するその勇姿に、これからの青森ねぶた祭や東北地域を盛り上げていきたいとの熱い思いを込めている。前ねぶたは新しく作りなおすそうだ。

【歴史】

東北電力ねぶた愛好会は昭和 23 年から運行を開始した。経営理念が「地域繁栄への奉仕」ということもあり、地域との共栄を目的に始めた。現在のコーポレートスローガンも「より、そう、ちから。」であり、地域に寄り添い、地域の伝統文化の継承と地域の盛り上げに貢献するため運行を続けている。東北電力ねぶたはオイルショックの影響を受け、昭和 48 年に出陣を休止した。しかし青森市内に在住するねぶたを愛する有志からの復活を望む声が多くあり、労働組合が中心となって東北電力ねぶた愛好会を立ち上げ、昭和 59 年に運行を再開した。運営資金は愛好会員からの会費を中心に、関連企業や取引先からの協賛金により賄っている。現在も労働組合と会社が協力してねぶた運行を行っている。

【運行】

今年は 8 月 2, 4, 5, 6, 7 日に出陣する。会員数は、お囃子が 50 人ほど、曳手が昨年と同じくらいの規模で、跳人が 100 人ほどである。東北電力ねぶた愛好会では花笠の着用は必須で、跳人として参加する人には貸し出しを行っている。囃子は社員が中心となった電囃会という部隊を持っており、その会員は 50 人ほどである。その中には勤務地が県外の人もあり、休日を利用して青森に囃子の練習に来る人もいるのだという。曳き手は、愛好会員を中心に行っているが、関連企業従業員の協力やアルバイト募集により対応している。

【制作】

ねぶたの制作は、立田龍宝氏が制作する。今までの東北電力のねぶたを制作していた京野和鴻氏の勇退に伴い、東北電力の昔ながらのねぶたから、また違うねぶたを見ることが出来るだろう。

【東北電力ねぶた愛好会囃子方 電囃会でんそうかい】

名前の由来は「東北電力の囃子の会」ということからきている。結成当初の先輩方の思

いや囃子のこだわりを大切に引き継ぎ、さらに後継へと伝えていくことに重きを置いて活動している。また囃子は「縁の下力持ち」という理念のもと、ねぶた本体や跳人を盛り上げるべく音を奏で、影ながら東北電力ねぶた愛好会を支えている。

文責 尾藤実裕

ヤマト運輸ねぶた実行委員会

～運送も運行も安全第一！～

【2023 年のねぶた】

2023 年のヤマト運輸のねぶたは北村隆氏の「綱館」である。「綱館」とは、源氏綱が九條羅生門で鬼の腕を落として、それを家に持ち帰った。腕を取り返そうと企んだ鬼は綱の伯母に化けて彼の家に侵入し、「鬼の腕を見せてください」と綱に言う。そこで綱が腕を持ってきたところで正体を現し、腕を取り返そうとする話である。

「綱館」はねぶたの中でもデザインが固定化しやすい題材である。しかし、北村隆氏は「型にはまらないねぶたを作りたい」という気持ちが強く、鬼と源氏綱が家で戦っている場面を黒蜘蛛の登場や瓦が飛び散る躍動感で、今までの固定化されたイメージをいい意味で壊そうとしている。

昔ながらの題材ということもあり、「原点回帰」という言葉が似合うねぶたとなることが期待される。昨年のヤマト運輸のねぶたは明るいねぶたというイメージが強かったため、今年のねぶたを見て新鮮な感覚を味わえるかもしれない。

見どころは、ねぶただけではない。今年は運行に使用される山車の台車や提灯を一新する。さらに、クロネコヤマトコールも復活する可能性がある。楽しさと安全性を意識した運行で観客とヤマト運輸でねぶた祭りを盛り上げることが大いに期待できる。

【歴史】

全国の運送会社の代表で組織している会合が偶然ねぶたの時期に青森で開催され、その時に日通のねぶたが参加していることにヤマト運輸関係者が刺激を受けた。特に宅急便の仕組みを作ったヤマト運輸 2 代目社長が、ねぶた祭りを気に入り当時の担当者が出陣に向けて準備することになった。出陣までに 2～3 年かかっており、観光ねぶたとして出陣していた「大和山（青森県教区連合会）」の枠が空いたところにヤマトが推薦されて運行することとなった。当時担当していた社員がねぶた師の穂元鴻生氏と顔見知りで、穂元氏がデビューするタイミングに依頼することができた。また、穂元氏の一番弟子である大白我鴻氏に意思を継いでいただき 3 年ほど依頼した。その後北村隆氏に依頼し現在に至る。毎年、青森の主管支店長が団体責任者、労働組合の青森の委員長が運行責任者として参加している。実行委員は青森市内の集配しているドライバーで、日中が忙しい。メンバーはヤマトの社員だけで

構成しているため、仕事をしながら稼働の合間をみて会議を行っている。

【運行】

実行委員 30 人、ヤマトの主管支店社員 20 人、アルバイト 80 人が中心で運行している。今年はそれらにさらにスタッフとして 40 人が増援されている。また統制班も別にいて、跳人はヤマトの関係者だけで 100～150 人もいる。跳人と一緒に、「クロネコジャンプ」と呼ばれたものや、「クロネコヤマトの宅急便」というフレーズの掛け声を 20 年近くやってきた。囃子会である「夏響会」の運営の助成金はヤマト運輸から出しているため、会費を取らなくても最低限の運営はできる。最初は社員と取扱店だけで構成されていたが、今では一般の参加者と一緒に行っていて、会長もヤマトの社員ではない。会員は大人子ども合わせて約 100 人。ヤマト運輸の本社公認の祭りは青森の「ねぶた」と四国の「阿波踊り」のみである。予算も決算も会社の経理と同じで、経費として申請するので無駄遣いはしないようにしている。

【制作】

ねぶたはねぶた師の一番作りたいものを作ってもらっている。4 年前から LED が全体の 7～8 割を占めるため、700～800 個は LED を使用している。色や明かりの表現によっては、白熱球と蛍光灯を使い分け、白熱球の代わりに省エネボールを組み合わせて使用している。基本的には、ねぶた祭りが終われば壊し、また新しいねぶたで表現してもらう。一番の希望は一年間ご褒美で見せることができるワラッセに入ること、そうすれば、出張で来た県外の方たちにもヤマトのねぶたを見てもらうことができるからである。結団式に当たる「三位之会」でねぶた絵図のお披露目をする。

【囃子】

ヤマト運輸ねぶた実行委員会の囃子はヤマト囃子方夏響会が担当している。夏響会の名前には、囃子が夏の空に響き笑顔で奏でるという意味が込められている。女性も男性に負けない迫力で演奏をするのが特徴的である。賞を狙うよりも最後まで笑顔で楽しく演奏できればよいと考えている。進行囃子、戻り囃子は細かい部分に関してこだわりを持っており、特に昔から受け継いできた、ころばし太鼓は非常に大切にしている。

文責：松村南

NTT グループねぶた

～SDGs を掲げ、いざ出陣！～

【2023 年の見どころ】

NTT グループねぶたの今年の題材は「釈迦降誕」、制作者は北村春一氏である。

釈迦が誕生した場面を表現したねぶたとなっている。釈迦は「天上天下唯我独尊」と言い、人間は誰とも代わることができないとして命の尊さを説いた。NTT グループは SDGs に積極的に取り組んでいる企業である。「釈迦降誕」のねぶたを通して、世界情勢が安定するようお願いを込めつつ「人や国の不平等をなくす」、また、昨年のねぶたの廃材等を再利用して今年のねぶたを制作し「つくる責任、つかう責任」という SDGs の目標を発信している。

さらに、今年は青森市立北中学校とコラボレーションし、中学生が囃子に参加する。中学校とのコラボレーションをする団体は珍しく、NTT グループと中学生の、コラボしたことにより倍増した熱気を感じられるだろう。

今年の前ねぶたはNTT ダイナミックグループとドコモのポインコの2台を予定している。

【運行団体の歴史】

NTT グループねぶたは通算して 63 回目の参加となる団体である。発足当初は「NTT グループねぶた」ではなく、「電気通信省」や「電気共済会」という名称だった。名称が電気通信省だったとき、部長から「職員と一緒に何か楽しくやれるものはないか」という話があり、職員の士気高揚と、青森市の祭りに貢献するためにねぶたを出陣したのが始まりだ。グループ関連会社である NTT ドコモ、NTT ファシリティーズ、NTT データスマートソーシングなどが協力してねぶたを出している。

【運行について】

近年北村春一氏のねぶたが制作者賞に入賞していることから、団体として賞を取る事に前向きになっている。だからこそ、今年は 4 年前に受賞した知事賞に続く、大賞を狙いに行く勢いである。

【制作者について】

過去の制作者は福井祥司氏、内山龍星氏で、現在は北村春一氏が担当している。若手の制作者育成の観点から、次代を担う人材を探していたところ、北村蓮明氏の息子である北村春一氏と話をすることがあり、ねぶた制作に対する熱意が感じられたことなどから制作を依頼することとなったのが始まりである。

北村春一氏は、ねぶた見学会やワークショップの開催など、ねぶたの継承、育成にも積極的に取り組んでいるねぶた師である。

【囃子について】

NTT グループねぶたの囃子は赤誠会が担当しており、現在結成 36 年目である。赤誠会には扇子持ちが多く在籍していることから、扇子持ちと囃子の会とも言われている。会の結成の際は、正調囃子保存会の方々ではなく NTT グループの社員が中心となって結成した。会の名前には真心をもって活動してほしいという当時の会長の思いが込められている。演奏を綺麗に見せるために、太鼓・笛・鉦ともに鳴らしどころを意識している。

文責：松村南

JR ねぶた実行プロジェクト

～疫病退治の神に願いを込めて～

【2023 年の見どころ】

今年の題材は「強弓 島の為朝」。疫病を寄せ付けない神として崇められている為朝の勇姿に新型コロナウイルスの終息を願う。為朝が鬼夜叉と戦う場面を表現している。2020 年、2021 年とねぶたのない夏を経験。3 年ぶりの開催となった 2022 年は様々な規制があった中でも安全に盛り上がりのある運行であった。今年（2023 年）は、規制が緩和され、4 年ぶりの通常運行となる。制作者の竹浪比呂央氏は、昨年（2022 年）「鍾馗」で動きのある 6 匹の鬼を表現した。今年（2023 年）は 2 体でうち 1 体が鬼というシンプルな表現に魂を込める。更にパワーアップした鬼の表現にご注目あれ。

【運行】

昭和 39 年に「国鉄」として初陣、平成元年からは「JR ねぶた実行委員会」に名称を変更し平成 21 年から現在の「JR ねぶた実行プロジェクト」に名称が変更された。囃子は「JR ねぶた囃子会」が行う。メンバーは社員と一般の方で、会員数は 160 人ほどで構成されている。跳人については、通常 1 日で約 300 人が参加しており、規制緩和された今年は例年通りの人数参加が見込まれる。蒸気機関車の動輪をイメージしたデザインの跳人衣装が特徴である。4 年ぶりの通常運行となる今年は、コロナ禍前（2019 年以前）に近づけた形での運行を行う。

【制作】

平成 16 年以降の制作は竹浪比呂央氏が担当している。以降は新青森駅開業や北海道新幹線開業など新幹線の推移や“交通安全”・“速さ”にちなんだ題材が特徴だ。平成 28 年には、「蝦夷ヶ島と九郎義経」がねぶた大賞に輝いた。

過去のねぶた紹介

平成 29 年「剣の護法」護法童子の雄姿に、安心安全な交通網への願いを込めて。

平成 30 年「風神雷神」五穀豊穡をもたらす風神と雷神を表現。

令和元年「浄焰 日本武尊」新しい時代の繁栄と安寧を祈って。

令和 3 年「術競べ 袴垂保輔と鬼童丸」東京オリンピックの熱戦を、妖術競べに擬えて。

令和 4 年「鍾馗」新型コロナウイルス感染症第六波の一日も早い終息を願って。

文責：成田葵葉

青森市役所ねぶた実行委員会

～切り開く新たな挑戦、いざ出陣！！～

【2023 年の見どころ】

今年の制作者は青森ねぶた祭初陣となる福士裕朗氏である。今回のねぶたの題名は、「主従の絆 牛若丸と弁慶」だ。弁慶が 1000 本の刀を集めているところ、1000 人目に出会った牛若丸と刀をめぐって戦い、大薙刀を振るう弁慶と軽やかに立ち振る舞う牛若丸を再現している。2 人は平家打倒の合戦に臨み、最後に奥州で最期を迎えるまで一心同体の関係が続けた。このねぶたは、主従の深い「絆」が芽生えた五条大橋での出会いの場면을表現したものである。

市役所ねぶたは東北絆まつり 2023 青森出陣することが決まっていたため、「絆」と関連させ、この題材になった。また、「牛若丸と弁慶」は我生会の得意分野とのことなので運行が楽しみである。

市役所ねぶたは「誰でも自由に楽しく」というテーマで運行しており、年齢に関係なく誰でも参加できる。また、小さいお子様が参加しやすいように、安全に跳ねることが出来る「子どもハネトスペース」を設けるとともに、運行終了後にはお菓子が貰えるといった子供が楽しめるような工夫がされている。

前ねぶたは、JAL ほか青森公立大学が登場する。福士裕朗氏が公立大生であった時に、前ねぶたを制作し運行させたことがあったが、それ以来となる。今回は青森公立大学開学 30 周年を記念して、ねぶた師をめざす公立大生が制作したねぶたが出陣し、市役所ねぶたを盛り上げる。

【運行団体の歴史】

青森市役所ねぶた実行委員会は 1958 年（昭和 33 年）に運行を開始し、今年で 63 回目の出陣となる。職員の福利厚生の一環としてだけでなく、地域のお祭りへの参加を通じて、ねぶたの伝統文化保存への寄与ということを目的としている。市役所職員は公務としてではなく、任意団体である市役所職員の互助会の事業に参加という形でねぶた祭りに参加して

いる。

【運行について】

市役所のねぶた運行に関わる事務は人事課が主に担当しており、曳き手は、職員の他にアルバイトを雇い補っている。運行方は、職員から運行委員を募集し、運行の安全確保を図っている。囃子方は、市役所内に任意の組織があり、現在 50～60 人が登録している。4～5 月には囃子体験会を行っており、新規加入者の受け入れも行っている。メンバーは主に市役所職員であるが、家族で参加している方、かつて市役所に勤務していた方が参加している。

【制作について】

前述のとおり今年は青森ねぶた初陣となる福士裕朗氏が手がけている。初の試みとなることで期待されている。市役所ねぶたは、制作者が作成した原画をねぶた実行委員会の長である市長が確認し、題材を決定している。テーマや題材に指定はなく、制作者がつくりたいねぶたを制作している。

【囃子の特徴】

一番に言える特徴は、「みんなが楽しんで演奏している」という点であり、大きくは地域交流の場となっていることだ。国道に出たときでも沿道のお客様にも楽しんでもらえるよう、太鼓の台車から遠く離れた観客席の方に出向いて笛と手振鉦を演奏するという工夫をしている。演奏は青森ねぶた正調囃子保存会の囃子をベースにしており、昭和 35 年からこれまで連続してねぶた祭りに参加している。今年は青森公立大学のねぶたサークルの学生約 30 名も参加することとなり、若い力も加わっている。

文責 鳴海愛佳

青森市 PTA 連合会

～親子で楽しく参加 大型ねぶた運行存続へ～

【2023 年の見どころ】

今年の題材は、『天狗と牛若丸』である。平治の乱で父の源義朝が謀反人となり敗死し、鞍馬寺に預けられた牛若丸はある日、東谷の僧と共に、西谷の花見の招きを受けて連れられ出かけた。しかし、その席に見知らぬ怪しげな山伏が割り込んできたので、気を悪くし牛若丸を置いて帰ってしまった。

ただ一人残された牛若丸の素性を知った山伏は花の名所へと案内した。暫くの間、二人は親しく語り合い、やがて山伏は自分が鞍馬山の僧正坊そうじょうぼうという大天狗である

と正体を明かした。牛若丸の願いである平家討伐が達せられるよう大天狗は武術や剣術、兵法を牛若丸に伝授した。牛若丸が十一歳の時のことだった。

源氏の再興を予言し、戦場での守護を約束して大天狗は姿を消した。牛若丸と子供たちの姿を重ねて、この物語の牛若丸が成長していく姿を子どもたちに見せ、子供たちも牛若丸のように成長して欲しいという思いが込められている。コロナ禍の間参加できなかった分の思いを今年にぶつける。

【運行について】

今年（2023 年）で創立 75 年目となる青森市 PTA 連合会。市 P 連が大事にしている考え方として「安心・安全・気持ち良く」がある。子供が多く参加する団体だからこそ安心・安全であることが何よりも大事にされている。安心・安全を実現するため、保護者や学校の先生が引率し、参加者がはぐれていないか確認している。水樽も子供の体力の消耗に配慮し、6 つ用意されている。また、ここでは運行中の飲酒喫煙は全面禁止になっている。そういう意味でも「安心」だろう。市 P 連は子供と保護者が楽しく参加でき「来年もまた来ようね」と思ってもらえることを目指している。また、ベビーカーでの参加や参加してくれた子供たちへお菓子をプレゼント、学校の短パン、学校 T シャツで参加可能などの裾野を広げ、参加しやすい工夫も行っている。

囃子は PTA 囃子方が担当している。小中学生が中心となっているためわかりやすい。10 年ほど前は囃子だけで 600 人いたが、現在は少子化の影響もあり、人数は 50～60 人ほどである。昔は小学 1 年生から囃子に参加することができたが、それではコースを一周する体力が持たないなどの問題があり、現在は小学 4 年生以上の参加となっている。囃子は各小学校において他団体の囃子方などに練習をみて頂きながら、市 PTA 連合会囃子方では七節のスピードだけを合わせるようにしている。これは、学校によって習っている囃子の種類が違うためである。囃子方で参加する子供たちは囃子衣装（単 P 指定の短パン、T シャツに半纏もしくはダボシャツ、股引き、胸当に地下足袋またはズック・スニーカー【サンダルは不可】）を着用する。

跳人で参加する人数は保護者も併せて 1 日 100～150 人ほどである。跳人での参加の子供たちはねぶた衣装（正装）の着用を基本とする。但し、正装の準備や着付けが難しい場合は学校の短パン、学校 T シャツにハチマキ、タスキ、シゴキでの参加を認めている。

曳き手やその他運行補助員は当連合会 OB、現役保護者、当会の趣旨に賛同していただいた有志などが集まって組織されている。また、運行日程は 8 月 3 日～6 日の 4 日間である。

【運行団体の歴史】

青森市 PTA 連合会ねぶたは、昭和 56 年に青森市教育委員会が主導となって発足した「中学生ねぶた」が原点である。発足当時から 2 度名称が変わったが、ねぶた出陣は今年で 40 回目である。当初「中学生ねぶた」として、教員・市内各小中学校の PTA 役員などを動員

し、平成2年まで10年続いた。子供の参加が減少気味になり、運行打ち切りの話も出たが、「このねぶたはやっぱり無くしてはいけない」という当時の連合会会長や役員の思いから、PTA連合会が運営と運行を引き受けることになった。しかしその後、多くの教員を動員することは厳しい等の話もあり、今度は「親子ねぶた」に名称を変え、PTA側が主となって引き継ぐこととなった。「親子ねぶた」は平成15年まで13年続いた。そして平成16年に「青森市PTA連合会ねぶた」に名称を変更し、現在まで続いている。主なスポンサーはハッピードラッグ（株式会社丸大サクラキ薬局）である。しかし、長年続けてきた青森市PTA連合会ねぶただが、存続の危機にさらされている。ねぶた祭りに大型ねぶたを出陣させるためには多くの関係者が時間と労力を費やしていく必要があり、市P連はねぶた祭りが終わるまでほぼ他の事業に手をつけられなくなるということ、少子化により関係スタッフがどんどん減ってきていること、主役である子どもたちの参加数が激減していることなどが理由で大型ねぶた運行のあり方を大きく見直さなければならない時期に来ている。

そこで、今年の祭り期間中、のべ500名の児童生徒（跳人および囃子）が集まらなかったら今年度の運行を最後に市P連大型ねぶた運行事業は廃止ということにした。参加したい、興味を持ったという小、中学生の方は、下記のURLから市P連ねぶた2023特設ページにアクセスしてみて欲しい。市P連大型ねぶた運行の存続はあなた方小、中学生に懸かっている。是非、市P連大型ねぶた運行に参加し、歴史をつくろう。

【制作について】

ねぶた制作を依頼する際、テーマはねぶた師にお任せしている。歴代の制作者には北川啓三氏、北村隆氏など多数おりますが、平成19年からは内山龍星氏が制作している。歴代の前ねぶたには、ポンデライオンや太鼓の達人（どんちゃん）、子ども達が制作した金魚ねぶたなどがある。今年はハッピードラッグのマスコットキャラクターであるハピマルと少年非行防止JUMPチームの山車が出陣する。

文責：熊地勇樹

青森自衛隊ねぶた協賛会

～地域を守る誓のねぶた。出陣～

【2023年の見どころ】

自衛隊は4年ぶりの出陣であり、現在のねぶた師の有賀義弘氏は今年で最後の出陣となる予定だ。今回のねぶたの題名は、「三国志」だ。中国は時代の変革期を迎えていたころ劉備と蜀漢、魏、呉による三国時代の物語である。このねぶたは志のため共に戦う誓いを立てている劉備、関羽、張飛の三人と、国と国家のために戦う自衛隊の姿を重ね合わせたものである。自衛隊らしいテーマとなっており、復活、信頼、誓いを込めたねぶたとなっている。

例年に比べ、華やかな色を多くつかっている。特に桃の花に注目だ。送りはねぶた制作者を目指す小財覚さんが制作しており、桃の花にちなんでテーマは「西王母」だ。美しい西王母にも注目してほしい。

【運行団体の歴史】

青森自衛隊ねぶた協賛会は、陸上自衛隊青森駐屯地に所在する部隊を基幹として、昭和 35 年から青森ねぶた祭に参加し、平成 29 年度の出陣で 55 回目の参加を迎えた。青森陸上自衛隊の正しい姿を地域の方に理解してもらうため、「地域の皆様との親近感の醸成と、郷土と共にある自衛隊の確立を目指すこと」を目的に出陣をした。自衛隊として青森駐屯地からねぶたを出陣した当初は、ねぶた師の佐藤伝蔵氏、千葉作龍氏、鹿内一生氏等に制作を依頼していたが、ねぶた祭りへ継続的に参加するには毎年高額の経費がかかるため、昭和 43 年頃から自衛官中心でねぶたを制作することとした。当初は、ねぶた師の佐藤伝蔵氏に師事いただき 3 名が見習いとして参加し、昭和 52 年から師事を受けた 3 名の自衛官が中心となってねぶたを制作した。このように、自衛隊の出陣は地元意識に根付いたものである。青森駐屯地の隊員は地元出身者が多く、自分たちの力で地元を守るという意識が非常に強い。自衛官として、また、青森市民として活動し地元を守っているのである

【制作について】

現在のねぶた師の有賀義弘氏は青森市出身の自衛官である。有賀氏の前に制作していたねぶた師は後継者が決まらないまま定年退職したため、十数年と一番長くねぶた制作に関わっていた有賀氏に白羽の矢が立った。ねぶたの制作は全て自衛官が行っている。現在はおおよそ 11 人が制作を手伝い、紙貼りの時も 15 人程度で行っている。

下絵の題材は、その年にあったテーマで枠組みが決まる。年度の特長、自衛隊の特長を踏まえ、今年度の大きな枠組みやテーマをねぶた実行本部長(青森駐屯地司令)が提示。その中で、テーマに沿った題材を有賀氏が掘り下げる。制作したねぶたは、祭り終了後に全て壊す。照明は全部外して来年も使えるようにするが、針金の再利用は難しいため処分してしまう。自衛隊ねぶたは一体もので制作していて、題材自体、初めて見る人にも分かり易いように選んでいるため、シンプルに迫力・色を楽しんでほしい。

【運行について】

前述の通り、自衛隊は 4 年ぶりの出陣となる。跳人、曳き手、お囃子、扇子持ち全て自衛官が行っている。跳人は約 120 人、曳き手は約 30 人いる。自衛隊はのびのびと行っており、後継者育成に力を入れている。

【囃子について】

青森自衛隊ねぶた協賛会囃子部では、観客の皆さまを楽しませ客席との一体感を感じら

れる囃子が見どころとなっている。担ぎ太鼓などを演奏しながら沿道を盛り上げている。

自衛隊は命令によって隊員が招集されるが、囃子部に参加する隊員は「囃子をやりたい人」、「みんなで楽しむことが好きな人」が集まり活動している。また、隊員だけでなくその知り合いや駐屯地近くの住民も参加できる。

文責 鳴海愛佳

マルハニチロ倭武多会

～記念すべき 55 周年！！海上運行を目指し、いざ！出陣！～

【2023 年の見どころ】

2023 年のマルハニチロ倭武多会は、例年に引き続き手塚茂樹氏が制作を担当している。今年の大形ねぶたの題材は「三日月祈願 山中鹿之助」である。制作は手塚茂樹氏である。戦国時代に一度は滅びた主家を再興するべく八面六臂の活躍をした武将、山中鹿之助。コロナ禍や戦禍などの患いが消え去り、再び平穏で明るい世が戻ることを願っているということを表現している。

最近では LED を使った明るいねぶたが多いが、マルハニチロは昔からの電球の暖かみのある光とねぶた全体に飾ってある提灯が特徴である。

マルハニチロは今年で記念すべき 55 周年ということからも例年にも増して気合が入っている。今年は新型コロナウイルスの規制も全面的に無くなり観客も増えることから、跳人を含めたねぶた自体のダイナミックさに注目していただきたい。

【歴史】

マルハニチロ倭武多会の歴史は古く、2016 年に 50 回目の出陣となった。これは戦後の昭和 28 年を第 1 回として数えているが、実際はもっと昔からある。当初は昭和 28 年「大洋漁業」。昭和 44 年「大洋漁業ねぶた会」、昭和 55 年「青森は倭武多会」、平成 6 年「青森マルハ倭武多会」。平成 20 年にマルハとニチロの 2 社が統合された経緯から「マルハニチロ倭武多会」に名称が変更され現在の形になった。

【運行】

今年は 8 月 2、3、5、6、7 日に出陣する。跳人は 1 日に約 160 名以上。去年とは変わり、新型コロナウイルスの規制も無くなったことから、衣装を着ていれば誰でも自由に跳ねることができる。囃子は約 80 人でマルハニチロ倭武多会囃子方、海鳴が担当している。進行の際「二丁ばち」、「二度ばち」、「流す」という 3 種類の太鼓の技とそれぞれの楽器の拘りを持って、ねぶた本体や跳人の方々の魅力をより一層際立たせる団体だ。ねぶた期間以外でも様々なイベントに参加しているのも鳴海の大きな特徴である。

【制作】

平成 26 年から手塚茂樹氏が制作を担当している。手塚氏はこの年に本団体で大型ねぶたの制作デビューをした。子供が見て「怖い」と思うような迫力のあるねぶたを制作したいと考えている。題材についてスポンサー側からお願いしていることは特になく、ねぶた師さんにお任せしている。見る人を惹きつける迫力満点のねぶたをどうぞご覧あれ！

文責 飯田栞音

サンロード青森

～『奪還』 サンロード魂を胸に～

【2023 年の見どころ】

今年の題材は、『北の耀星「毘沙門天」』である。毘沙門天は仏教における、天部の仏神で四天王の一尊に数えられる武神である。多聞天とも呼ばれ、十二天の一尊で北方を守護する。日本に於いては、五穀豊穡・商売繁盛・立身出世といった、現世利益を授ける七福神の一柱として信仰されている。このねぶたは、観音菩薩の脇侍として対で並ぶ事が多い、不動明王の化身である俱利伽羅竜王の御加護を得、眷属の鬼である羅刹と夜叉を従え、この世の悪を追い払わんと身構える毘沙門天の勇姿である。この物語から、疫病や争い事がこの世から無くなり、幸せや平和が広まることを、北の地青森から心より願うという意味が込められている。送りには、今年で生誕 1250 周年である空海が描かれている。

今年も入賞という目標や、地元と密着し、ねぶたの繁栄やねぶた祭りを通して地域貢献をするショッピングセンターとしてあり続けたいという想いは不変である。そのため、「ねぶた祭りを地元としてどうしていくか」を常に考え出陣している。また、制作者であるねぶた師の吉町勇樹氏は 2 年目ということで、昨年よりも気合を入れて制作されており、剣の青と竜の赤の使い方や色のぶつかりを防ぐなど、特に色にこだわっているため、是非、注目して欲しい。また、今年は新型コロナウイルスによる制限がなくなったことによりコロナ禍以前の運行に戻す、囃子の台車の一部を新調する、太鼓 6 台を横一列に並べるなど工夫しているため、昨年よりもパワーアップした運行を見ることができる。

【運行団体の歴史】

サンロード青森は、地元の人々に開業を知ってもらおうという目的で出陣することを決めた団体である。開業準備に追われるなか、ショッピングセンターの呼称の周知も兼ね、ねぶた祭りに参加することが良いのではと地元の出店者からの話もあり、制作が進められた。今年で 44 回目の出陣となる。

【運行について】

運行日程は8月3日～7日（昼）の5日間である。曳き手は現在、高校生のアルバイトが主となっており、HPで募集しており、その中には女性も多く存在する。跳人は特に子供連れ（ファミリー層）の参加が多い特徴があり、前方にベビーカーを押して参加することができたり、参加してくれた子供にお菓子プレゼントしたりなど、小さな子供でも安心して参加しやすいように工夫されている。浴衣はサンロード専用のものもあり、その他に主たるスポンサーの富士通・郵便局各々の専用の浴衣などを着ている。

囃子は「サンロード青森ねぶた囃子会」で約80人所属している。以前は「青森正調ねぶた囃子保存会」にほとんどの団体が依頼していたが、自分たちで囃子をやろうと平成3年に結成している。練習場所は倉庫を壊してしまったので、全体練習は荒川小学校の体育館やワラッセを借りて、パート毎の練習はサンロードの会議室で行っている。また、入会したものはみんな笛から指導し、メロディーを覚えた人から希望の楽器へ移行するため、全員が笛を吹くことができるというのが特徴である。また、サンロードといえば出発前の「集合・出陣太鼓」がある。これはサンロード青森囃子会のオリジナルである。スタート地点で「これから出発するぞ」という意味合いを込めて演奏され、大太鼓6台を使用しており、大きな見せ場となっている。そしてサンロード青森は、プロの演奏家である鳴海昭仁氏が指導者として携わっており、サンロード青森のねぶた囃子を盛り上げている。

サンロード青森の運行は、出店者の店長からなる店長会を中心にテナント及び主協賛先の方々に参加してもらうなどして人数を調節している。

【制作について】

1975年の初年度は、出陣を決めたのが祭り間近であった為、千葉作龍氏から山内岩蔵氏を紹介頂き、その後石谷進氏、そして再び千葉作龍氏が制作をすることとなった。山内岩蔵氏は1977年の1年間、石谷進氏は1978年から4年間、千葉作龍氏は1982年から2019年まで制作をした。千葉作龍氏は、2012年に第五代ねぶた名人に選ばれ、その後2016年大型ねぶたを制作して50年目を迎えた。

千葉作龍氏とは2020年（オリンピックが開催された時期）にサンロードの代表者である櫛引氏と2人で今後についての話し合いが行われており、その後中止が発表された。翌年の代替イベントでは千葉作龍氏は制作者ではなく関係者の立ち位置にいた。そして、千葉作龍氏は「2022年はどう、けじめをつけようか」と考えた末、昨年、最後の弟子である吉町勇樹氏に譲ることにした。大型ねぶたの題材は例年、経済情勢や災害の克服し平和を願うといったことが含まれていることが多い。また、今年の前ねぶたは、協賛である富士通 Japan（株）と共同船舶（株）の2台が出陣する。

文責：熊地勇樹

パナソニックねぶた会

～輝け！パナソニックの光 4年の想いをのせて～

【2023 年の見どころ】

パナソニックねぶた会の今年の題材は「孔雀明王と役小角」である。制作者は北村蓮明氏だ。孔雀明王は厄災を退ける神様という意味があり、コロナ禍で長くねぶたができなかったことに対する思いが込められたねぶたとなっている。ねぶたは、弟子入りしている役小角が孔雀明王に出会うことができたことを、役小角が使っている式神（鬼、タツノオトシゴ）も出てきて喜んでいる場面を表現している。前ねぶたは例年通り、パナソニックのブランドのものを出し、LED

にまつわる告知も入る。送りのテーマはサプライズとなっている。

パナソニックねぶた会は4年ぶりのねぶた祭りへの参加となるため緊張感がある。団体としては初の吹き流し方式の逆回りでの運行であるため不安も大きいが、事故・怪我がなく安全に運行し、祭りを楽しむことを目標としている。また、鈴を準備しており、今年は制限のない運行ができるため、手渡しで鈴を渡すことができるように体制を整えたい。

【制作について】

ねぶたは北村蓮明氏が制作しており、ねぶたのテーマはねぶた師に任せている。原画は例年1月末から2月初めにお披露目会がある。今年は2月1日にお披露目会が行われた。

パナソニックのねぶたは全てLEDを使用している。本体には1400個のLEDが使われており、LEDの色や圧力などの変化に合わせて位置を考えながらつけている。電球の他にも、蛍光管やテープ型など様々な種類のLEDを活用し、見せ方にこだわっている。

【囃子について】

囃子は、パナソニックねぶた囃子会が行っている。また毎年「青森わの會」が協力している。なお「青森わの會」の名前の由来は「私のわ」と「みんなとの輪」など、さまざまな「わ」をイメージしている。「青森わの會」は、囃子を子供に伝承し、子供と一緒に囃子を楽しむために結成された会である。

【運行について】

囃子方は人数が減少し、例年は80～100人が参加していたが、今年は毎日70人くらいが祭りに参加する。曳手の人数は例年通りである。今までは高校生のアルバイトだったが、今年はベテランの方が本体を曳く。跳人は若者の他に子供連れや関係者などが参加している。人数は他の団体と比べて中規模くらいであり、温かいイメージがあることが魅力でもある。扇子持ちは、年配の男性2人と双子の女性2人に加えて、今年は若手の男性2

人が行う。1人の扇子持ちがねぶたを動かすのではなく、色々な人に経験してもらい、扇子持ちの文化を途切れさせないために扇子持ち全員で動かすということが他の団体との違いである。年配の2人が全体、女性2人が中心をとり、若手2人がサポートをする。特に、ねぶたを回すときの双子の女性2人の連携に注目したい。

また、前ねぶたの脇には65インチテレビを積み、お客さんが楽しんでいる姿をリアルタイムで映す。蓄電池式で、バッテリーや発電機を積まないという点で、パナソニックの技術力も見せながら運行するというこだわりがある。

文責：三澤佳奈

に組・日本風力開発グループ

【囃子について】

マイクやスピーカーなどの音響を一切使用しない生演奏にこだわっている。また、あえて整列しないことで観客に楽しさや躍動感を伝えられるようにしている。オリジナルの半纏に誇りを持っており、認められた者だけが個々に採寸して作り着用できる一点物で、不要な総書記品の装着を禁止するなどのこだわりがある。初の運行団体お抱えの囃子方で荒川区の囃子を継承しており、この囃子を後世に保存、伝承することを目的としている。

【歴史】

戦後から出陣し2019年で73回目の出陣になる。消防団の中の一つの班で「に組」としてねぶたに参加している。当初は本町の地域ねぶた「消防団第三分団に組」として出陣しており、ねぶた師である北川啓三に制作を依頼していた。に組若者中心で活動しており、東芝が40年以上メインスポンサーについている。歴代のスポンサー企業はSANYO、サッポロなどで、5年ほど前からauもスポンサーに加わった。その他の資金は地元の飲食店や町内企業と町内にお住いの皆様からの協賛金で成り立っている。運営の中心である「に組本隊」は「に組」組頭を筆頭に約10名で構成されており、ねぶた運行全体を仕切る役割担っている。他に20年の歴史を持つ「に組般若会（はんにゃかい）」と「に組に援会（にえんかい）」があり「に組」の協力会としてねぶた祭本番の際、運行統制を行っている。一昔前、カラス跳人の全盛期には必ず「に組」のねぶたが最後尾で、カラス跳人を制圧していた。

【囃子】

「青森ねぶた囃子保存会 に組（に組はやし方）」は約300名所属しており、一年を通して囃子練習をしている。「に組はやし方」は白半纏が特徴的であり、それに憧れる人も多い。白半纏を着るためには、練習にきちんと参加しているかが重要で、1年間練習をしつかりやっているのが認められれば2年目の本番で白半纏を着ることができる。跳人の衣装や浴衣の貸し出し・レンタルはしていない。花笠だけは貸し出しをしていて、100～200個を用意

している。現在も跳人から人気があり 1000～2000 人の地元の若者が参加している。リヤカーを引くのはアルバイトであるが、ねぶた本体の曳手は「に組」のことが好きなボランティアの若者が集まっている。祭りを純粋に楽しむことが一番で、賞は後からついてくるものだと考えている。北村隆氏に依頼してから 2019 年で 11 年目。毎年テーマ設定はしないが、2016 年は 70 周年の記念として消防団の纏（まとい）を取り入れてもらった。

【活動】

に組は内外の活動が広く、2016 年に青森県で行われた六魂祭に参加。震災復興のためのねぶた出張にも積極的で阪神淡路や東日本の震災の時にも復興祈願でねぶたを出陣させた。最近では熊本へも出張しており今年も遠征を予定している。2015 年には、イタリアのミラノ万博にねぶたを出した北村隆氏に協力して、一緒に参加を果たした。音響設備を必要としないため、行動が早いのが特徴だという。

文責：佐々木てる

青森山田学園ねぶた実行委員会

～見よ！青森山田の若者力！～

【2023 年の見どころ】

2023 年の青森山田学園の題材は「鎮西八郎」である。鎮西八郎の時代にいた源為朝が世を収めていた時に天然痘が流行していた。しかし、源為朝は天然痘を物ともせず政治を続けていた。さらに、源為朝は弓の名手である。これらの要素にインスピレーションを受け、コロナ禍でもめげずに活動が続けてきた青森山田学園を表現している。

青森山田学園の大型ねぶたは、今年から北村隆氏から変更となり、その弟子にあたる塚本利佳さんが担当する。彼女は北村隆氏の娘である北村麻子氏の弟子でもあり、北村隆氏、麻子氏 2 人の要素を組み込んだねぶたが期待される。

青森山田学園の魅力は何と言っても若さゆえの熱気だろう。今年はねぶた師も新しくなり、新鮮さが増した運行となることが期待される。教育機関からの参加ということもあり、若さはもちろんのこと、自由と規律が共存した、統率の取れた、まさに「学生らしい」運行に注目である。

【運行団体について】

1971 年、青森大学開学 3 年目に初の出陣を飾る。当時最大の後援者であった青森県信用組合が、理事長・木村正枝氏に働きかけたのがきっかけである。まだ経営学部のみで、学生数も 120～130 人。ねぶた責任者であった斎藤守太教授を先頭に、大学全体で参加した。当時は、現在のように青森山田学園ではなく青森大学として運行。また、先頭の役員団の前に

青森山田高校のブラスバンドが演奏しており、「学生らしいねぶた運行」が行われていた。

その後 1989 年（平成元年）より毎年出陣しており、最初に賞（田村麿賞）をとったのが 1994 年の『宇治川の先陣争い』。制作者は北村隆氏である。この年は跳人賞も獲得しダブル受賞であった。制作者の北村隆氏は平成 2 年から現在に至るまで青森山田学園のねぶた制作を受け持っている。その間、田村麿賞、ねぶた大賞受賞歴は 6 回。特に平成 18、19、20 年と 3 年連続でねぶた大賞を受賞し、青森山田学園のねぶたの全盛期を作った。北村氏の第 6 代ねぶた名人への道のりは山田のねぶたにあるといっても過言ではないだろう。

青森山田学園として出陣するようになったのは 2003 年（平成 15 年）から。そこから「学園ねぶた」の愛称で出陣し続けている。OB、そして学園関係者の力が、「学園ねぶた」の源だ。

【運行について】

なんといっても学生生徒中心の元気ある跳人が魅力。曳き手は主に部活（野球部・剣道部）の学生である。そこに教職員・OB が加わって運行される。囃子は OB 中心の「隆櫻會」。會の名称は、受賞全盛期に理事長であった故「北村隆文」氏と現制作者「北村隆」氏の「隆」、学園のトレードマークの「桜」からとっている。青森市の教育機関としては唯一単独で大型ねぶたを運行しており、青森山田学園から輩出される全国的にも有名なスポーツ選手の活躍が、毎年運行に花をそえている。

文責：松村南

青森県板金工業組合

【2023 年の見どころ】

青森県板金工業組合は、運行開始から 56 年目を迎えている。青森県板金工業組合の今年のねぶたの題材は「火雷天神 菅原道真」である。ねぶたは怨霊伝説の契機となった「清涼殿落雷事件」、道真公が火雷天神と化した姿を表現している。

【運行について】

注目すべきは、跳人の数だ。多い時は 300～400 人ほどいるそうで、制限のないねぶた祭が出来ることから、板金に数多くの跳人が参加することが期待されている。例年、最終日の七日目の昼も多くの人が跳ねていて、跳人大集合が見られるだろう。また、海上運行を目標としている板金では、花笠の着用を必須とし、統一感を出すことで上位入賞を狙っている。曳手は板金の青年部が担当している。お囃子は、一心會と言って、初代会長の上野山さんが「みんなが一つになり、囃子の演奏をする。ひとつの心になり仲良くやる」という意味を込めて命名した。みちのく北方漁船博物館駐車場の一角で練習を行っている。ま

た祭の当日は毎年、跳人として全国からバイク・ライダーが集合する。ねぶたの時期になるとフェリー埠頭近くのキャンプ場にテントを張って宿泊し、連日参加する。

【制作について】

ねぶた師は北村春一氏である。今年は「女性のねぶた」ではなく、迫力のあるねぶたとなっている。前ねぶたは今まで通りで、スポンサーは日鉄鋼板(株)、日鉄鋼板(株)、(株)シグマット、NS 建材薄板(株)、(株)角弘、(株)吉田産業、JFE 鋼板(株)、JFE 商事鉄鋼建材(株)である。

文責：尾藤実裕

ねぶた愛好会

～ダイナミックな迫力あるねぶたに注目！～

【運行団体について】

ねぶた愛好会は、ねぶたを好きな人たちが集まって立ち上げられた団体で、今年で連続出陣 43 年目となる。ねぶたの制作は 25 回にわたり石谷進氏に依頼していた。現在の製作者は諏訪慎氏である。スタッフは 3、4 人という少人数で大型ねぶたを制作している。大きい団体のスポンサーはなく、諏訪先生が描く今年のねぶたがデザインされた手ぬぐい、T シャツ、市内業者からの提灯等を販売し、資金を調達している。40 年間一切スポンサーをつけずに運行してきた唯一の団体であり、皆さんがスポンサーとなって毎年出陣している。

今年の愛好会の参加日程は 8 月 2、3、5、6、7 日だ。曳き手はボランティアと高校生のアルバイトを雇い、跳人は完全に自由参加だという。ねぶた愛好会は自主団体として設立されたため、囃子もねぶたの制作もすべて自分たちでやるというのが特徴である。

【お囃子について】

ねぶた愛好会囃子委員会の会員は 200 人ほどいる。本番には 100 人程度の方が毎年参加。練習は毎週土曜日の夕方頃から岸壁で行っている。以前は平和公園で青空笛教室という練習会も行っていた。太鼓のたたき方はプロの演奏家指導の元、シンプルなものに変更した。

【今年のねぶたについて】

今年の大型ねぶたのテーマは「雪山童子」である。雪山童子は、お釈迦様が前生で修行をしていたときの名前である。鬼が不思議な詩を唱えているのを耳にした童子が、鬼に食べられる代わりに詩の続きを唱えてくれるように頼んだ。鬼は再び詩を唱え、童子はこの詩を多くの人に伝えるために木々や岩に刻み込み、約束通り鬼の口に身を投げた。すると鬼の姿はたちまち帝釈天という神様になり、童子を空中で受け止め地上に降ろし、いのちをかけ

た修行をほめたたえたという物語である。

このテーマにしたきっかけは、毎年行われる小中学生ねぶた下絵コンクールで弟子の倉内裕太さんが「帝釈天と月の兎」という題材でチャレンジし、それに関連付けて、帝釈天を作ってみようと思っていた時にたまたまタイミングも合い、一緒に同じような題材でやろうと思ったからである。

今年の前ねぶたは、金魚ねぶたと兜を被った大谷翔平選手だ。毎年、その年の話題になったものを前ねぶたとして制作している。去年も大谷翔平選手だったが、今年は今年でまた1から新しく作るそうだ。送りのテーマはお釈迦様の誕生で、周りにうさぎやゾウがいる。

【制作について】

2023 年のねぶた愛好会は、例年に引き続き、諏訪慎氏が制作を担当している。諏訪氏が制作するねぶたはサイズ感を重視している。シンプルではあるが、迫力のあるねぶたを作るよう工夫しているという。今年のねぶたは、大きな鬼の顔と、おくりまで伸びるへびに注目だ。見る人を惹きつけるようなおどろおどろしいねぶたをどうぞご覧あれ！

文責：飯田栞音

公益社団法人 青森青年会議所

～師匠の思い出と共に！いざ！出陣！～

【2023 年の見どころ】

今年の題材は立田龍宝氏の「国性爺合戦 和藤内・甘輝の復興」である。青森青年会議所においては、立田氏デビュー10 作品目であり、ねぶた師を目指すきっかけとなった師匠である内山龍星氏の思い出の題材だという。この題材は、中国人の父と日本人の母を持つ和藤内と、かつての明の将軍甘輝が、共に戦い明国の復興を遂げたものであり、コロナ禍からの復興の今、市民が手を取り合い私たちの故郷を発展させていこうという想いが込められている。

青森青年会議所では、市民のためのまちづくり、市民のための人づくりに力を入れて協働するまちへの発展を目標にしているため、初めてねぶた祭りに参加するきっかけにもなり得るだろう。

【運行団体の歴史】

青森青年会議所は、創立 15 周年の記念事業として昭和 41 年に運行を開始した。今年で 54 回目の出陣となる。青森青年会議所はまちづくり団体であり、主に地域に対しての運動ということに力を入れて活動している。そのため、地域の伝統文化の継承を目的として祭りに参加している。青森青年会議所の活動の中で、ねぶた出陣事業は地域に対してまちづくり、

ひとつづくりの一番有効な手法であると考えられており、地域活動の一部となっている。ねぶた祭を通して、青森を愛し、市民としての誇りを持つ人財を増やしていくことが明るい豊かな社会の実現に向け、大切な部分であると考えている。

【運行について】

青森青年会議所では、過去に跳人として多くの人に参加してもらい、跳人やねぶた祭の楽しさを知ってもらうため、「跳トモプロジェクト」というものが行われた。また、各家庭にあるが使用されていない衣装をリユースする「衣装再生プロジェクト」も行われた。また、大型ねぶたの NFT アート販売などねぶたに関する多くの活動を行ってきた。今年は4年ぶりのフルスペックのねぶた祭が戻ってくるため、まずは、例年通りの運行を取り戻すことを第一にしている。これらの活動から、ねぶたに関わる新たな取り組みの模索や、SDGs にも貢献しているといえる。また、囃子方である JC はやし隊には、青森青年会議所所属メンバーや OB などとも在籍し、運行団体と囃子方との距離が近いことも魅力の1つだろう。

文責：西川花菜

日立連合ねぶた委員会

～常勝軍団復活！いざ！頂点へ！～

【2023 年の見どころ】

今年の大型ねぶたの題材は北村蓮明氏の「新田義貞伝説 龍神へ太刀を捧ぐ」である。新田義貞は鎌倉時代から室町時代にかけての戦いの中で活躍した武将で、荒れていた海に太刀を捧げて、海の神「龍神」が波を静めてくれたという海のエピソードである。ねぶたは、太刀を捧げ祈った新田義貞の前に龍神が現れた場面である。右にいるのが太刀を差し出している義貞で、左が海の神、龍神である。龍神と一緒に描く、ダイオウイカとリュウグウノツカイは、急速に進む地球温暖化問題へ警鐘を鳴らすという意味もある。

日立連合ねぶた委員会はお囃子・運行・制作・諸々含めて一体感がある団体である。それぞれのチームの立場に関わらず、互いに協力し合いながら一致団結して準備を進めてきた。また、お囃子は絶対的な実力をもっており、演出の手法は一緒でも出せる迫力が他団体には負けない。ベテランの扇子持ちによる安全・安心な運行と蓮明さんらしい「ねぶた」をどうぞご覧あれ。

【団体の歴史】

日立連合ねぶた委員会は 2015 年に 50 年賞を受賞した歴史ある団体である。受賞歴が多く、2017 年には 14 年連続での海上運行という偉業を成し遂げた。また、日立の囃子方である「凱立会」も囃子賞を過去に 13 回受賞している。コロナ禍では、感染症の流行にも負けず、「凱立会」は Web などでも様々な活動を行ってきた。ねぶた期間以外でも様々なイベ

ントに数多く参加している団体だ。

【ねぶた制作】

日立のねぶたを最初に制作したのは第 3 代ねぶた名人佐藤伝蔵氏である。そして、2004 年から北村蓮明氏が制作している。ねぶた制作に関しては、ねぶた師に全てお任せしており、ねぶたの題材などもねぶた師が決めている。2013 年には、LED を導入したねぶたで初めて大賞を受賞している。北村蓮明氏の持ち味である、鮮やかな色彩と細部までこだわった繊細な作りのねぶたに今年も注目したい。

【凱立会】

凱立会は、初代青森ねぶた正調囃子保存会会長である南了益氏が大切にしてきた「囃子、技法、歴史、心」を受け継ぎ、全てを伝えていく趣旨で結成された会である。賞に関係なく、普段から勉強や練習をし、最高の囃子を祭りで届けること、正調囃子をはじめとした囃子に携わった先人たちの思いを受け継ぐことを理念としている。特に注目すべきは太鼓である。本来 53 節あった囃子をどう 7 節に落とし込むか、熱心に研究し、強弱だけでなく演奏している姿から囃子にかける熱い思いが伝わるだろう。

文責：飯田栞音

消防団第二分団ねぶた会・アサヒビール

～『燃える』 迫力満点の運行を～

【2023 年の見どころ】

今年の題材は、『田村麿 大嶽丸を討つ』である。伊勢国鈴鹿山に棲む鬼神・大嶽丸が暴威を振るう為、一帯は全く人通りがなく、宮中への貢ぎ物も途絶えた。事態を重く見た朝廷は、坂上田村麿に大嶽丸討伐の勅命を下した。田村麿は、三万の大軍を率いて鈴鹿山に向った。妖術にたけた大嶽丸は、暴風雨を起し雷鳴を轟かせ峰全体を巨大な黒雲で覆った。更に討伐軍めがけ空から火の雨を降らせた。なす術がなく田村麿は撤退した。神仏の加護を受けるより道はないと日夜一心に祈願を続けた。

ある夜、ひとりの白髪の老人が、夢枕に立って、「大嶽丸を討つのは、容易な業ではない。討伐を望むならば、この山中に棲む、鈴鹿御前の協力を得ることだ」とつけた。後日、険しい道を分け入ると、突然どこからか美しい女が姿を現した。この美女こそ鈴鹿御前であった。ある夜、童子に姿を変えた大嶽丸が鈴鹿御前のもとに忍んで来た。田村麿は大嶽丸の宝剣二本を奪って迎え撃った。だまされたと気付いた大嶽丸は激怒して口から炎を吐きながら剣や鉾を雨のように降らした。そこに毘沙門天と千手観音が現れ襲いかかる剣や鉾をことごとく払い落した。田村麿が一心に祈願して矢を放つと、数千に分かれて鬼神の顔面に突き刺

さった。無事、大嶽丸を討ちとり平和な世の中が戻ったという。

この物語から、平穏な世界が訪れることを心より願うという意味が込められている。全体的に赤を強調しており、炎が『燃える』様子を表現している。

また、制作者は今年から内山龍星さんに変更となった。昨年も参加したかったが、スタッフの家族や関係者への感染を考慮して参加できなかったため、2019 年以来、4 年ぶりの参加となる今年にその悔しい思いをぶつけて、全力で盛り上げたい、楽しみたいと思っている。

【運行団体の歴史】

消防団第二分団ねぶた会・アサヒビールの歴史は長く、今年で 71 回目の出陣となる。『青森ねぶた誌』を紐解けば、1952（昭和 27）年に青森消防第二分団三班がはじめて登場しているが、1955 年の記載では、7 回目の出陣となっている。歴史的には青森ねぶたはもともと地元の消防団や港町の関係者がねぶたを出陣させていた。そのため、に組・東芝（71 回目出陣）とならび消防団としてはその伝統を受け継いでいる団体といえるだろう。アサヒビールがスポンサーになったのは 1990 年（平成 2 年）からである。その他ヤマモト食品、スバル自動車、マツダ自動車などもスポンサーについたことがある。

ただし消防団は地元の区域が中心であり、青森市の中心街、安方、新町、古川付近が第二分団の区域である。そのため協賛の依頼に毎年商店街に足を運んでいる。消防団の団員は 50 名であり、現在も活動している。

【運行について】

団員が中心となって運行を支えている。大人らしく迫力のあるのが消防第二分団の運行の特徴であり、中でも、運行を盛り上げるかけ声台車は、どの団体にも負けず、立派である。今年はマツダアンフィニグループも運行の協力をする。

曳き手は青森中央高校の学生のアルバイトで行われている。運行日程はこれまでは 8 月 3 日～6 日の 4 日間であったが、今年からそれに加えて 7 日の昼も運行となる。跳人は例年約 200～300 人で、地元の事業者や青森中央学院大学をはじめとする学生、スポンサー関係の方々など幅広く参加している。8 月 3 日は青森板金が運行しないため、ライダーズが跳人として飛び入り参加することがあるという。囃子は、龍鼓会が担当している。龍鼓会は、第 5 代ねぶた名人千葉作龍先生のねぶたのもと、大太鼓を鳴らしきるといふ思いから命名された。演奏は、消防団第二分団の囃子方なので「格好よく」をコンセプトに、自分がかっこいいと思う囃子をやり、その上で全体が合うように統一することを目指している。また、自分だけでなく周りも楽しくさせる人、即ち囃す人という「本物の囃子方」が今、そして未来に残るよう努めている。龍鼓会は現在約 100 人程の会員で構成されている。また、今年から運行スタッフの半纏衣装の色を漂白あるいは染色される前の素材そのものの色である「きなり色（生成色）」に変更した。

【制作について】

1982（昭和 57）年から千葉作龍氏がねぶたを手掛け、以後 34 年間制作を続けてきたが、2017 年、孫弟子である立田龍宝氏に、そして、今年、千葉作龍氏の弟子である内山龍星氏へと千葉流の伝統が続いている。ねぶたの題材は制作者である内山龍星氏に一任されている。前ねぶたは、協賛であるアサヒビール、日清食品、日本電気（NEC）が出陣する。また、照明は、以前は電球が多かったが、今年からほとんどを LED に変更し、より見映えが良いものとなった。

文責：熊地勇樹

プロクレアねぶた実行プロジェクト

野村昂史待望のデビュー 団体ともに初陣へ！

【見どころ】

昨年（2022 年）4 月、青森銀行とみちのく銀行の経営統合によりプロクレアホールディングスが設立され、今年初陣となるプロクレアねぶた実行プロジェクトは、「組織融和」を掲げた運行を目指す。新人ねぶた師の野村昂史（のむら・たかし）氏も初陣となるため、新たに参加する初々しさ、新鮮さが見どころである。

【運行】

囃子団体の名称はプロクレアねぶた囃子方である。職員とその家族を中心に組成しており、約 200 人という大規模な囃子集団となる。メンバーの大半は囃子演奏の経験がなく、去年の 10 月ごろより社内外の経験者から指導を受け練習を行っている。練習場所は産業会館または青森銀行・みちのく銀行本店。大型の太鼓台車、音響台車が登場する。跳人は職員とその家族中心に一般を含めた 200 人ほどとなる。オリジナルの浴衣を用意している。運行団全体では 500 人ほどの規模となる。今年の目標は「事故なく、安全に。」

【制作】

制作者は新人ねぶた師・野村昂史氏である。今年（2023 年）が初陣となる。昨年 9 月にねぶた制作から退こうと思っていた矢先の声掛けだったという。念願のねぶた師デビューとなった。これまでに培ったねぶた制作技術やねぶたへの想いを最大限発揮できるよう制作に励んでいる。ねぶた師としてデビューした今年は、今まで制作者として加わっていた頃とは異なり、「人を動かす」過程があるため頑張りたいと意気込む。「スタッフが怪我なく完成できるように」というスタッフ想いの一面も見られた。題材は大日大聖不動明王。昨年（2022 年）1 月には題材が決まっており、満を持して制作に望んでいる。髪の毛には特にこだわりがあるという。

文責：成田葵葉

第三部 資料：地域ねぶた調査の結果

2023 年度地域ねぶた運行に関する調査結果

はじめに

本調査は 2023 年度 公益財団法人青森学術文化振興財団事業「地域ねぶたの活用と地域活性化」事業で行われたものである。調査報告に関しては別途作成してあるので、そちらをご覧ください。本結果は、調査票、単純集計、自由回答の一部を紹介したものである。参考なれば幸いである。

★質問票と単純集計

- 1 地域ねぶたはいつ頃から開催していますか。 (年頃から)
- 2 地域ねぶたの開催は 2023 年で連続して何回目になりますか。(平均 20 回目) (n=23)
- 3 2024 年度も開催予定ですか。(n=26)

開催する (23)	開催しない (1)	未定である (2)
-----------	-----------	-----------
- 4 「青森ねぶた祭」に子どもねぶたとして参加する予定ですか

参加する (1)	参加しない (24)	未定である (1)
----------	------------	-----------

費用に関して (n=25)

- 5 昨年かかった費用はおおよそいくらぐらいですか (45.3 万円)

5.1 おおよその内訳をお教えてください

制作費	(32 %)
運搬・輸送費 (ねぶたの搬送、人の移動)	(2 %)
人件費	(6.8 %)
場所代 (ねぶた保管など)	(1.5 %)
飲食代 (当日の打ち上げ、弁当、飲み物など)	(19.2 %)
参加した子どもへのお菓子等	(17.4 %)
その他	(16.3 %)

5.2 資金・収入についての内訳をお教えてください

協賛金	(26.7 %)
町会費	(16.6 %)
寄付金（個人・法人問わず）	(17.9 %)
ねぶた祭実行委員会以外からの補助金	(13.8 %)
運営者の持ち出し	(11.2 %)
繰越金	(7.6 %)
そのほか・グッズ販売など	(2.6 %)

運行時の参加人数に関して

6 全体での運行参加者は1日平均どの程度です (134 人)

そのうち地域外の人は何れくらいの割合ですか (19.1%)

6.1 おおよその内訳をお教えてください (有効回答数 24)

統制	(15 人)
囃子方	(25 人)
曳手	(13 人)
跳人（一緒に歩くなどの一般参加者を含む）	(90 人)
統制以外の警備（警察等）	(4 人)

6.2 参加者のおおよその年齢層をお教えてください

小学生以下	(58 人)	n=23
中学生・高校生	(14 人)	n=22
大人 (62 人)	→うち高齢者／65 歳以上 (32%)	n=21

6.3 コロナ前と比べ、人数は減っていますか 有効回答 24

減った (12) 同じくらい (10) 増えた (3)

地域ねぶたの課題について (n=26)

7 地域ねぶたの課題について伺います。

7.1 現在、地域ねぶたを運行することで困っていることは何ですか。（複数回答可能）

①運営者の育成（運営者の高齢化） 19 (76%)	②ねぶた本体の調達 6 (24%)
③資金調達 11 (44%)	④囃子方不足 12 (48%)
⑤曳手不足 10 (40%)	⑥跳人不足 2 (8%)
⑦参加する子供の数 13 (52%)	⑧観客不足 3 (12%)
⑨近隣町会間の協働体制 5 (20%)	⑩困っていることはない 1 (4%)

⑪その他

- ・ねぶた制作
- ・保管場所（三台だすため）

7.2 地域ねぶた存続の意義はなんですか（n=26）

- | | | | | | |
|---------|----|-------|--------------|----|-------|
| ①子どものため | 21 | （84%） | ②地域人のつながりのため | 15 | （60%） |
| ③高齢者の活力 | 5 | （20%） | ④伝統文化継承のため | 12 | （48%） |
| ⑤地域の賑わい | 16 | （64%） | ⑥特に意味はない | 0 | |

8 ねぶた本体について（n=26）

8.1 ねぶたの制作は来年どのようにしますか。

- | | | | | | |
|------------------|----|-------|-------------|---|-------|
| ①今年使用しているものを使用する | 11 | （44%） | ②借りてくる | 2 | （8%） |
| ③買う | 1 | （4%） | ④プロに制作を依頼する | 6 | （24%） |
| ⑤プロ以外の作れる人に依頼する | 4 | （16%） | | | |
| ⑥自分達で制作する | 7 | （28%） | | | |
| ⑦その他（ | | | | | |

8.2 今後ねぶた本体について、将来的にはどのようにするのがよいと思いますか？

（n=26）

- | | | | | | |
|----------------|---|-------|------------|----|-------|
| ①自分達で制作する | 8 | （32%） | ②作れる人に依頼する | 10 | （40%） |
| ③すでにあるものを借りてくる | 4 | （16%） | | | |
| ④定期的に既存のものを買う | 5 | （20%） | | | |
| ⑤その他 | | | | | |

- ・今年のようにねぶた師さんに指導いただき子供たちが作ることがいいと思う
- ・一度制作すれば、5年は使用できる

自由回答欄 地域ねぶたについて、ご自由にご意見をどうぞ

（一部固有地域名などについては、〇〇、（中略）といった形で変更しています）

・わが町会のねぶた運行は、1日目は町内を運行し、2日目は〇〇地域の合同運行に参加しています。合同運行に参加している分、費用は節約できています。課題は、人材育成です。次に引き継ぐ人たちをいかに育てていくかが大きな課題です。費用は寄付等で不足分を補っていますが、今後確実に入る費用の確保も問題になると思います。

・人口減少、少子高齢化などの影響で、今後の運営や、人員不足も考えていかなければならない。また、制作するスタッフなども地元住民からのお手伝いが少ないため、制作を中心

にしている人が出来なくなった時、ねぶたの確保が問題となるため、先々のことも考えて育成をしていかなければならないが、その手段が自力では難しい。人員、地元の協賛金、ねぶたの確保は近々の問題である。

- ・〇〇地区は小中学校が各 1 校、幼稚園、保育園があるので、そこに在籍する子どもたちや、他地域に通っている子どもたち、さらに、高校生、大学生など、子どもたちの力を借りながら、地域が一体となって、子どもたちを育てる環境を作り出していくことが大事だと思います。その中でも、ねぶたの合同運行は、だれでも参加し、お手伝いしたり、楽しんだりできる行事だと思うので、ぜひ続いて欲しいものです。しかし、運営責任を持てる団体は高齢化し、子ども育成会のメンバーですら、60 代、70 代がほとんどです。今年は、学校運営協議会が運営しましたが、本来の仕事ではないと思います。来年に向けて、今後、どのように取り組んでいったら良いのか、私たちも検討中というところです。
- ・ねぶたの由来、歴史など基本的な事柄を家庭の中で学んだり、話し合ったりすることが重要だと思う。我々、大人たちの中でねぶたの太鼓を叩いたり、笛を吹いたことのある人は極めて少ない。また、紙貼りなどの制作をやってみたことのある人は、ほぼ皆無に近い。ねぶたが観光化してしまって、自分たちの日常とかけ離れてしまっているのが実情で、伝統文化の「継承」に危機感を持っている。そのためにもシンポジウムや学習会の開催などを大学側に期待したい。
- ・コロナ感染症の影響で、ねぶた運行が中止となり 3 年連続中止が続いた。令和 3 年、令和 4 年はねぶた運行が再開することができたが、コロナの影響で、令和 5 年になると、「子供ねぶた運行」団体が数多く減少した。運行団体関係者の高齢化、資金調達問題等環境が厳しく悪化、今後も運行団体の減少が考えられる。今考えられるのは、「子供ねぶた運行団体」の責任者が一堂に会し、情報交換をし、現状の課題について話し合う必要があると思います。
- ・将来的にねぶた祭りと云えど、担い手不足、子どもの減少により衰退すると思います。今から対策を講じておかなければ存続できなくなる恐れがあります。特に、ねぶた本体の制作者の育成に力を入れて参りたい（簡単ではありませんが）。大太鼓の価格高騰、保管場所の確保も悩みの種になっています。
- ・私たちが住む〇〇地区では、昭和 50 年代～平成 10 年代辺りまで地区合同によるねぶた運行と手踊りの練り歩き、盆踊りなどが行われておりました。しかし、町会の高齢化を理由にねぶた運行と手踊りは廃止、盆踊りのみが残りましたがそれも 3 町会ほどが行うだけになりました。（中略）

現在は、人形ねぶたと太鼓台車などをお借りできる体制となり、運行統率も地域住民や

交番の協力があり、以前と比べては、スムーズな運行ができております。今後の課題としては、地域ねぶた運行に対して未だに町会からのバックアップが任意であることや、新型コロナウイルス感染症の影響が響き地域住民の参加が思うように集まらないことがあります。しかし、地域ねぶた以外でのイベントでは多くの参加が見られるため、根気よく継続していくことが大事なのかなと思い、今後もできる限り実施していきたいと考えています。

- ・古い町会はどこも同じだと思いますが、住民の高齢化と子供の親も少ない状態で、じいさん、ばあさんでなんとかやっている状況です。反省会（打ち上げ）も集まりが悪いため、次世代の方へお願いする機会もなく、あと数年で子供会自体なくなると思います。
- ・町内会のねぶた運行を 1 日のみでやっています。4～5年前は〇〇町会から 6 台の合同運行をやってにぎやかさがありました。年々、参加する町会からのねぶたが減って、出来なくなりました。でも、地域（町会）の活性化の一助と将来に続くように人材の確保にも力を入れたいと思っています。
- ・町会住民の高齢化により、囃子方&曳き手を十分に確保できないため、地域内の中学校に呼びかけ、人員を確保している。
- ・地域の結びつきを強くする役割は、確実にあります。故郷に対する思いを醸成するのが地域ねぶた。住民と町会が相對する。良い機会にもなります。子供たちの数を具体的に把握する場面でもあり、単位 PTA と情報交換の場面にもなる。
- ・子供の参加が少ない（少子化影響）のでいろいろな工夫して参加人数を増やしたい。町内の制作者が高齢者のため、今後の実施の課題。町内会の運営が高齢化しており、若い人の参加が少ない。今後の町内ねぶた祭実施の後継者育成が課題。
- ・青森市では、小屋づくり、または場所が思うように借りることができない。役場に行って書類を出すと借りることができるが、地域の了解がなければ続けられないと思う。
- ・ねぶた本来の姿、「地域ねぶた」よりも商業的な合同運行を新聞、テレビが取り上げる。スポンサー主義なので仕方がないが、江戸時代から続く地域の伝統文化継承は（特定機関に）任せられない。佐々木さん頼みます。
- ・昭和 54 年開始当時から自主制作で進めてきた。平成 30 年、40 回あたりから制作スタッフの高齢化による影響が顕著になってきた。（ともにメンバーの仕事との両立）併せてね

ぶた小屋の場所、制作・維持管理に関する費用と労力等にも影響が出始めた。

今になって思うことは、地域ねぶたの存続の最大要因は「地域に根付いた人間の確保」であると考えます。当団体のスタッフはほとんどが子どものころからの地域の人間である。仲間として外部からの転入者はいるが、決して、中心となれるものではない。従って、「地域土着」のものが一人、二人退出していくと自然に衰退の方向に進んでいく。後継者の育成がうまくいけばこの問題は解決するのだが。

自主制作団体と、購入・借り受け団体とでは抱える問題点は大きく違います。（ちなみにわたしは最初から下絵制作、骨組み、色付け等制作全般、そして運行責任者まですべてを取り仕切ってやってきました。今年で 79 歳になりました。）

- ・今回は自前のねぶたを持たない。隣の町会の子ども会と合同で実施した。